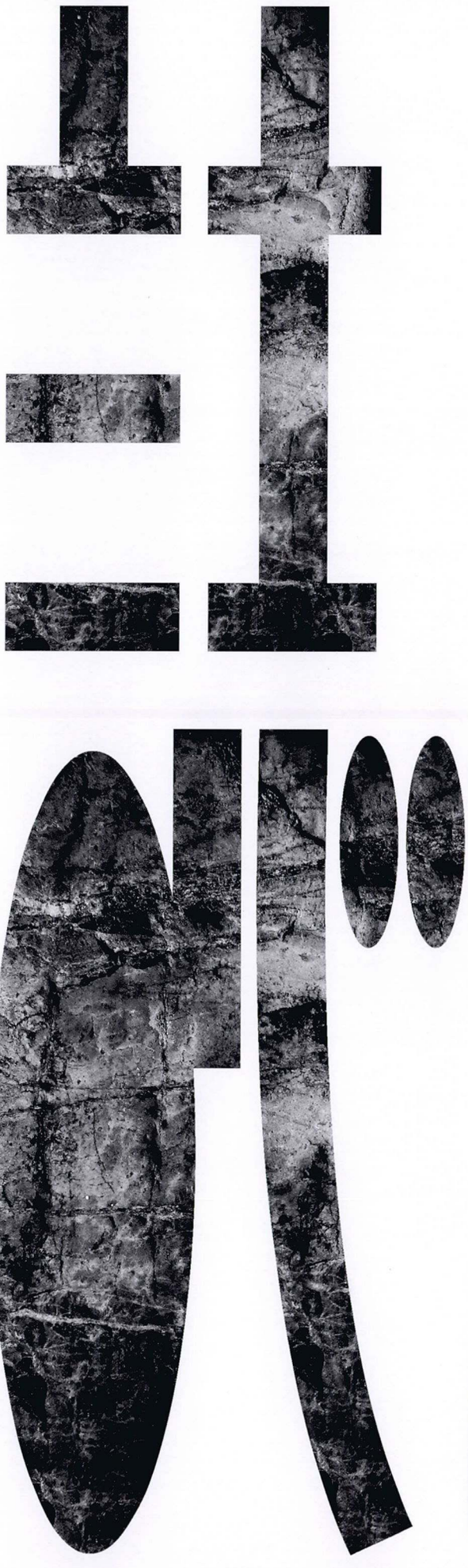
建築と社会

Architecture and Society
2007
No.1025
日本建築協会
08

建築系雑誌が伝えるもの



建築設備の設計・施工専門誌

建築設備と配管工事

8月増刊号

B5判・本文：172頁
定価3,200円

建築設備用 管継手

建築物の設備には、鋼管、樹脂管、ステンレス鋼管、銅管ほか様々な種類の配管材料が使用されています。管継手は、接続、方向転換、分岐、集合、回転など配管と配管、また配管と各種機器との接続に用いられています。その種類はねじ、フランジ、溶接、メカニカルとあり、その形状もソケット、エルボ、T字、クロス、レジューサ、ベンドと多岐にわたります。

本増刊号は、建築設備用管継手を素材・種類別に分けて紹介・解説し、また用途別の事例の紹介と合わせ、管継手についての正しい情報、施工上のポイントについて、詳しく紹介します。



9月号

B5判・本文96頁・定価2,000円
年間購読料24,000円（増刊2冊含、税・送料込）

◆特集①：厨房 ― 設計と設備 ―

食をつくり出す厨房は、業種によってその設計及び設備が異なります。

また、一つの事故が致命的になりかねない厨房にとって、効率化のみならず安全性も求められ、建築基準法、消防法、食品衛生法等の法規もあります。本特集ではその設計や最新の動向、業種別厨房の事例、電化厨房・ガス厨房の特徴、最新厨房設備機器・防災対策機器の紹介をして頂き、効率的で人と環境にやさしい厨房設備設計の参考となる事を目的としております。

◆特集②：普及進む直結給水

衛生面・スペース面・エネルギー面・維持管理面にてメリットのある直結給水方式の普及が更に進んでいます。今までは対象外とされていた小学校等でも直結給水への変更がされようとしています。本特集では、直結給水システムの経緯と現状から東京都の取組紹介、関連機器の最新情報を紹介します。

快適な住環境を追求する電化住宅の専門誌

Amenity & Electrification

住まいと電化

9月号

A4変形判・96頁・定価1,400円
年間購読料16,000円（税・送料込）

◆特集：あらためて　住宅性能

地球環境問題への対応が迫られている中、住宅に於いても更なる性能の向上が求められています。本特集は省エネ法、品質確保促進法などの充実を受け、住宅性能評価、自立循環型住宅、環境共生住宅認定などの住宅性能向上に対する様々な取り組み、そしてそれに寄与するオール電化の役割を紹介いたします。

日本工業出版（株）販売課　〒113-8610　東京都文京区本駒込6-3-26　FAX 03-3944-6826
http://www.nikko-pb.co.jp/　E-mail：sale@nikko-pb.co.jp/

携帯・PHS OK **0120-974-250**

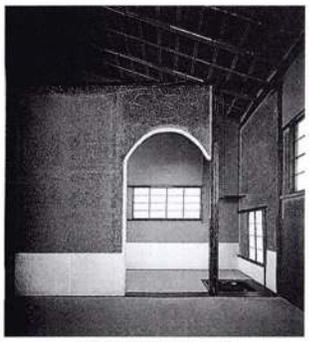
平成19年度 表彰受賞者

長年にわたるご自身の事業活動及び当協会へのご功績に対し、国土交通省及び大阪府へ下記の方の表彰の推薦をしましたところ、受章をされました。
今後ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

●5月3日　大阪府知事表彰
〈建設関係産業功労〉
和田　克朗　理事

●7月10日　国土交通大臣表彰
〈建設事業関係功労〉
中井　　進　副会長
上原　正行　常任理事（出版委員長）
設楽　貞樹　常任理事（編集委員長）

第24回茶室見学会 西翁院の澱看席（重文）

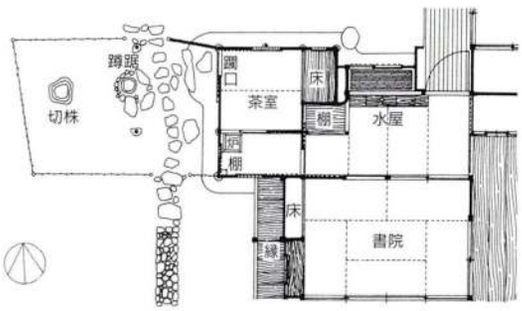

西翁院澱看席内部

日　時　2007年 9 月29日(土)
14：00～16：30
講　師　中村昌生
京都工芸繊維大学名誉教授
集　合　現地・西翁院正門前
京都市左京区黒谷町121
京阪電鉄「丸太町」駅から徒歩約20分／市バス「岡崎神社前」下車徒歩約８分
定　員　30名（先着順）
参加費　会員4,000円、一般5,000円
学生は半額
申　込　FAXまたはE-mailで、
①催し名「茶室見学会」
②氏名
③会員・一般の別
④職場名または学校名
⑤参加証送付先（郵便番号）
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証は、実施10日前頃にお送りします。
申込先　㈳日本建築協会編集事業課
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル７F
TEL：06-6946-6981
FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp
主　催　㈳日本建築協会編集事業課
事業委員会情報見学小委員会
担当主査　森田芳次／安井建築設計事務所

今回は、利休の孫、千宗旦（1578年～1658年）の高弟のひとり藤村庸軒作の西翁院内の茶室を見学いたします。宗旦四天王の一人、藤村庸軒が、京都の黒谷に貞享年間頃（1685～６年）に設けた茶室であり、はるか淀、山崎方面を遠望できる景勝の地であることから、「淀看席」ともいわれています。

茶室は、本堂の西北に接続して西向きに建てられていて、前面の軒を短くして、切妻のさしかけ屋根を付設した珍しい外観を組み立てています。内部は三畳敷きですが、客座二畳と点前座の間に中柱を立て、仕切り壁を付けて「道安囲い」の構えをしています。天井は一面に化粧屋根裏の構成で、高くなった床の小壁に板額を掲げて調和を図っています。
今年は宗旦の没後350年を迎えることでもあり、以前（10年余り前）に見学していますが、再度見学会を企画させていただきました。

（森田芳次）



西翁院澱看席
平面図

14団体新年交礼会 50周年記念友好と交流の集い
けんちく―名曲コンサート♪♪

【日本テレマン協会】
延原武春氏によって1963年に創設されたバロック音楽の総合団体。1985年には、管弦楽団・合唱団総勢70名が東ドイツ(当時)の〈バッハ生誕300年記念国際音楽祭〉で公演した。

日本建築協会をはじめ在阪の建築友好14団体による新年交礼会が昨年に50年を迎えたことを記念して、建築14団体の主催でテレマン室内管弦楽団によるコンサートを、下記のとおり開催します。ご参加ください。

日時　2007年 9 月28日(金)
19時開演～20時30分
(開場18時)
場所　いずみホール
大阪市中央区城見1-4-70
住友生命　OBPプラザビル
TEL 06-6944-2828
演奏　テレマン室内管弦楽団
(指揮：延原武春氏)
【プログラム】曲目変更の場合あり
Ⅰ．バロックコーナー
・テレマン／組曲「ドン・キホーテ」より
・ヴィヴァルディ／「四季」より
・バッハ／G線上のアリア
Ⅱ．鍵盤コーナー
・モーツアルト／「きらきら星変奏曲」
・ショパン／「別れのワルツ」「子犬のワルツ」
・バッハ／「トッカータとフーガ」
(パイプオルガン演奏)
Ⅲ．オーボエコーナー
・バッハ－グノー／「アヴェマリア」
・プッチーニ／「トゥーランドット」より
・ポピュラーミュージック
「星に願いを」「浜辺の歌」「愛燦燦」など
◀チケット特別頒布価格：1,000円
◀チケット枚数　50枚
(締切８月31日(金)。ただし、代金受け取りの先着順とします)
◀申込方法：本会会員が代表者として申込めます。代表者氏名、住所、電話番号、FAX番号、Ｅメールアドレス、所属団体およびチケット希望枚数を、FAX：06-6946-6984 または E-mail：jigyoka@aaj.or.jp でお知らせ下さい。
代金はお振込みいただくか、日本建築協会事務局までご持参下さい。
◀振込口座
・三井住友銀行 大阪中央支店
(普通No.860034)
・三菱東京UFJ銀行 瓦町支店
(普通No.210054)
・りそな銀行 北浜支店
(普通No.272234)
・郵便振替口座 (00910-9-39975)
◀問合せ先：㈳日本建築協会
TEL 06-6946-6981

※小学生未満は参加出来ません。
※当日は先着順に係の者が誘導する座席で鑑賞していただきます。
※欠席される場合は、別の方が参加されるようご配慮ください。

出版委員会企画
第31回<プロのノウハウ>講座

住宅エクステリアの100ポイント

〔大阪府建築士会及び日本建築家協会のCPD対象(2単位)〕

日　時　2007年 9 月14日(金)
18：00～20：00
会　場　OMMビル　B1Fギャラリー
大阪市中央区大手前1-7-31
講　師　藤山　宏（㈲造景空間研究所代表取締役）
定　員　40名
受講料　会員2,000円、一般2,500円、学生1,000円
テキスト　『住宅エクステリアの100ポイント』テキスト代　特価2,200円(税込)
申　込　先着順で受講票を送ります。①催し名「第31回プロのノウハウ講座」②氏名③会員・一般の種別④職場名または学校名⑤受講票郵送先住所、〒⑥連絡先電話番号⑦大阪府建築士会、または日本建築家協会のCPDを申請される方は、その旨を、お知らせ下さい。
申込先　〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビル7F
㈳日本建築協会編集事業課
TEL：06-6946-6981
FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp



藤山　宏(ふじやま　ひろし)
1947年　佐賀県鹿島市生まれ
鳥取大学農学部農学科卒業後、電鉄系造園会社、住宅会社造園課、外構造園工事会社を経て、1994年㈲造景空間研究所を設立

平成19年度 建築工事実務講習会

〔＊CPD対象
本講習は、㈳大阪府建築士会（7単位）及び㈳日本建築家協会（6単位）のCPD認定講習です〕

と　き　2007年10月11日(木)
午前９時15分～午後５時15分
ところ　大阪府建築健保会館
６階ホール
大阪市中央区和泉町2-1-11
TEL 06-6942-3621
定　員　100名（先着順）
受講料　15,000円（含テキスト代）
＊消費税を含む
＊テキストは、当日配布

■趣旨と内容
- 本講習会は、建設業はもとより、官公庁・設計事務所・設備会社など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
- 現場実務の基礎である「施工計画」と、「仮設見積」に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。

■交通：地下鉄谷町線・中央線
谷町四丁目駅８号出口より徒歩５分



■申込要領
下記受講申込書に、必要事項をご記入の上FAXでお送りいただくか、下記①～⑨の事項をE-mailにてお知らせ下さい。受講料は、銀行振込・郵便振替等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講券をお送りいたします。

■申込先
㈳日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル７F
TEL：06-6946-6981　FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp
URL：http://www.aaj.or.jp
- 受付時間　毎日、午前９時半～午後５時半。ただし、土・日・祝日を除く。
- 詳細は、事務局編集事業課へお問合わせ下さい。

- 三井住友銀行
大阪中央支店（普通No.860034）
- 三菱東京UFJ銀行
瓦町支店（普通No.210054）
- りそな銀行
北浜支店（普通No.272234）
- 郵便振替口座　00910-9-39975

■科目・講師

施工計画

平野　剛氏
鹿島建設㈱関西支店建築部
生産計画グループ課長（技術担当）

河野浩司氏
㈱竹中工務店大阪本店
建築技術部副部長技術担当

施工計画は、品質を確保し、安全で能率よく経済的に本体工事を進める鍵をにぎっています。この講習会では、仮設から地下、躯体、仕上、設備にわたり、適切な施工計画の要点をわかりやすく解説します。

仮設見積

阪井　聡氏
㈱大林組本店建築生産技術部
仮設見積り・施工計画-1グループ長

仮設工事費は、非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

キ　リ　ト　リ　線

平成19年度建築工事実務講習会 受講申込書

No.

社団法人　日本建築協会　御中

年　　月　　日

① 郵便番号	⑥ 受講者氏名	⑦年齢
② 所在地		
③ 事業所名（または氏名）		
④ 担当責任者		
⑤ 電話番号		
⑧ 受講料支払方法	• 事務局へ持参　• 現金送金　• 銀行振込　• 郵便振替　（いずれかに○印を付して下さい）	
⑨ 会員区分	• 当会会員　• 大阪府建築士会会員　• JIA会員（No.　　）　• 無所属	

※受講申込書が足りない場合は、複写して下さい。

東横堀川ライトアップ デザイン・アイデアコンペ ～水と光の回廊づくりへ～

太閤秀吉が開削した東横堀川。天下の台所・大坂を支えた動脈が、水都再生の新たなスポットとして再評価されようとしています。

光による都市再生をめざす大阪「光のまちづくり計画」では、大阪のまちの活性化の一翼を担うことを目的として、東横堀川をさらに魅力ある空間に変貌させていくため光による環境演出、空間デザインなどのアイデアを募集いたします。既成概念に捉われることなく、創造性に富み夢あふれるアイデアが広く多くの方々から寄せられることを期待します。

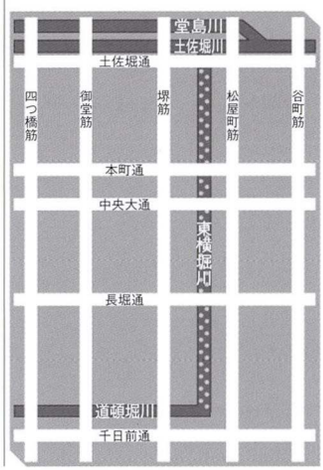
■内容

土佐堀川から道頓堀川の範囲にある東横堀川の「水面・水辺」「橋」「護岸」「阪神高速橋脚・高架」などを対象に、この場所の特性を活かした、あるいは新たな魅力を創造・発見する、光のデザイン、ライトアップのアイデアを次の2部門に分けて募集します。

・A アイデア部門
夢あふれるユニークなアイデア提案
・B デザイン部門
実現性も考慮したデザイン提案

■提出物

・A アイデア部門
アイデア趣旨、イメージなどA3サイズ（紙種類自由）横使い1枚にて提出
・B デザイン部門
デザイン趣旨、各種図面、イメージパースなどをA1サイズケント紙またはそれに類する厚紙（厚さ5㎜程度のスチレンボード等によりパネル化したもの）横使い1枚にて提出
いずれも紙類は自由。写真などの貼付けも自由



■応募資格、手続き

資格制限なし、事前登録等不要

■賞

・A アイデア部門
優秀賞（3作品）賞金各5万円、特別賞（数点）副賞
・B デザイン部門
優秀賞（1作品）賞金20万円、佳作（数点）賞金各5万円

■審査員―50音順―

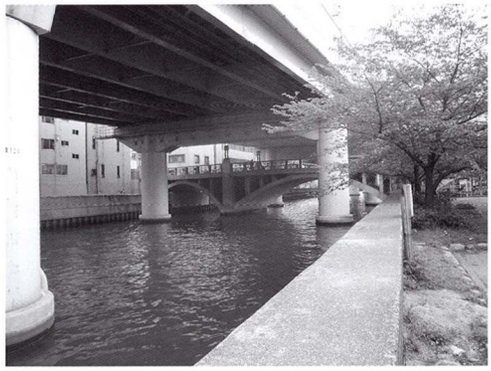
北川フラム
（アートディレクター：アートフロントギャラリー代表）
木下博夫
（阪神高速道路㈱社長）
佐藤友美子
（サントリー㈱次世代研究所部長）
橋爪紳也
（大阪市立大学大学院都市研究プラザ教授）
堀井良殷
（㈶大阪21世紀協会理事長）
面出　薫
（照明デザイナー：㈱ライティング・プランナーズ・アソシエーツ代表）
〈地元代表〉
大橋達夫（東横堀水辺再生協議会会長）

■応募締切

2007年8月31日（金）（当日消印有効）
郵送、宅配便、持参いずれも可。
持参は当日17：00までとします

■審査発表

2007年9月末（予定）
＊審査結果については、主催者ホームページ、日本建築協会会誌「建築と社会」等で公開いたします。


あなたの描くアイデアで水の都大阪・東横堀側を光のモニュメントに変えてください。（現在の本町通り付近）

■その他

・応募作品は原則返却しません。
・応募作品の著作権は応募者に属しますが、応募作品の広報利用、出版等に関する権利については主催者に属するものとします。
・入賞作品のコンセプト・アイデアの一部または全部を今後実際のライトアップ活動に採用することがあります。

■主催

東横堀川ライティング実行委員会
社団法人　日本建築協会

■問い合わせ先

「東横堀川ライトアップ デザイン・アイデアコンペ事務局」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31　OMMビル7階
日本建築協会内　担当：片山
TEL06-6946-6981 FAX06-6946-6984
E-mail：ken-sha@aaj.or.jp

詳しくは㈳日本建築協会のホームページ（http://www.aaj.or.jp）をご覧下さい。

東横堀川ライトアップ デザイン・アイデアコンペ―水と光の回廊づくりへ―　応募用紙

＊応募要項に同意して応募いたします。

フリガナ		年　齢	歳	性　別	男　・　女
氏　名					
所　属 （会社・学校名等）		部　署			
住　所	〒　　-				
TEL		FAX			
E-mail					
共同制作者					



作　品　募　集

「建築と社会」平成20年１月号の

「第14回会員作品特集号“私の空間作法”」

「建築と社会」１月号では会員作品発表の場として、**“第14回会員作品特集号・私の空間作法”**を企画しております。対象は、建築、ランドスケープデザイン、インテリアデザイン、まちづくり、アート等、建築に関わるすべてとし、表現方法は、写真、CG等の別を問いません。
みなさまの個性あふれる作品の応募をお待ちしております。

※

■提出資料

作品は、竣工作品、計画案を問いません。下記要領に基づいてお送り下さい。

1．写　真　外観・内観・ディテール・模型写真等のプリント
（サイズはキャビネ判程度、５～６枚）
2．CG等　パース、コンセプト図等
（パースの写真撮影等は致しかねますので、印刷原稿となる状態でお願いします）
3．概　要　作品名称、所在地、設計者、施工者名、建築面積、延床面積、構造規模、工期など。
4．説明文　作品についての考えを300字程度にまとめて下さい。

■掲載に際しての補足

1．掲載料は無料です。誌面は白黒ページとなります。
2．写真の撮影者名は必ず付記願います。
写真に著作権等が生ずる場合は、応募者にて処理願います。
3．掲載頁数は、原則として１社（１人）１頁とします。また、8月末までに竣工予定の作品を掲載希望の場合、写真等の原稿期日は配慮致しますので、ご連絡下さい。
4．建物の特徴や特殊な事柄については簡単な補足説明をお願いする場合があります。
5．作品の掲載順及び誌面レイアウトを含む特集全体の構成は、委員会にて担当致します。また、応募作品多数の場合等は、編集の都合により掲載できないこともありますのでご了承下さい。

■原稿期日及び送付先

1．期　日　**2007年9月28日（金）必着**
2．送付先　社団法人 日本建築協会編集委員会
「会員作品特集号」係
〒540-6591　大阪市中央区大手前1丁目7番31号
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
TEL. 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984

建築と社会

Architecture and Society
2007
No.1025
日本建築協会
08

Journal of the Arghitectural Association of Japan

■特集予告
9月号／建築基準法等大改正
10月号／第54回青年技術者
11月号／ガラスを考える

編集委員会（平成19年度）

■副会長
井上　豊
中井　進
■編集担当理事
上原　正行
岡田　聿之
木戸　徹
佐藤　栄一
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
吉村　英祐
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
飯田　匡
鈴木　克彦
田中　直人
辻　武之
藤原　光博
紅谷　昇平
松田奈緒子
△三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
安部　新二
△荒木　宏之
江副　敏史
奥村　明孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
小林　優子
所　千夏史
野田　隆史
枇杷　健一
松森　織江
★インテリア・住宅系
阿部　泰浩
加藤　力
神谷　浩司
黒柳　亮
高野　直樹
△田中　浩介
戸井賢一郎
ベリー史子
本山　仁
■構造分科会
秋田　智
岸本　光平
瀧野　敦夫
鶴田　潤
中塚　光一
難波　尚
△房安　智也
松村　健
向井　洋一
矢野　勇二
安野　郷
■設備分科会
△赤澤　正治
石井　勝秋
梶井　宏修
河井　康人
近藤　国夫
谷野　太志
夏井　重行
福谷　周
桝井　貴廣
村上幸三郎
山下　修
■施工材料分科会
桜井　和男
平田　茂良
△藤丸　啓一
松元　秀樹
山岡　篤人
吉田　正友
■法令分科会
赤井　英稔
伊賀　誠
△片岡　正和
金本　忠義
谷本　和子
中迫　悟志
文山　達昭
■作品作風小委員会
石塚なぎさ
居内　章夫
○井上　雅祐
稲垣　和江
池上　明
岩佐　進
加嶋　章博
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
納野　淳司
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
荒木　俊明
今井　成年
大竹　賢次
○虎谷　伸幸
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
■10年委員会
赤木　隆
川上比奈子
中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2007年7月25日
発　行　2007年8月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

特集　建築系雑誌が伝えるもの

総論　建築系雑誌が伝えるもの●本多友常 —— 12

各論　ではもっと大きな鯉を泳がせましょう I.M.Pei と私●東出清彦 —— 14

示すこころと受けとる心●山岸　豊 —— 16

アンケート　『a+u』●吉田賢次/『カーサ ブルータス』●吉家千絵子/『建築人』●徳岡浩二/『住宅建築』●平良敬一/『新建築』●大森晃彦/『新建築住宅特集』●佐藤　勤/『日経アーキテクチュア』●山本恵久/『建築と社会』●設楽貞樹　18

会告　平成19年度表彰受賞者．第24回茶室見学会・西翁院の澱看席（重文）．けんちく一名曲コンサート♪♪．〈プロのノウハウ〉講座㉛住宅エクステリアの100ポイント．平成19年度建築工事実務講習会．東横堀川ライトアップデザイン・アイデアコンペ～水と光の回廊づくりへ～．「私の空間作法」作品募集　1

作品作風　医療法人慈心会　咲洲病院　6

研究の風景　坂本研究室（東京大学生産技術研究所）　8

GAllery　リビングと外部空間（杉本季優）●居内章夫　10

法令コーナー　京町家の耐震診断・改修の促進に向けて●籾井太計司　24

設備の頁　CASBEEでSランクを取るためのメニューとノウハウ —(仮称)梅新第一生命ビルディング—●篠島隆司　25

新建材の頁　はりまかせ●菅　知史　26

information　京都国際デザイン会議クムルス2008を前に．建築環境デザインコンペティション実施．ビオトープ管理士試験実施．「建築仕上診断技術者」資格取得講習会．「安全開口部生産評議会」結成．医療福祉建築フォーラム2007．DESIGNERS SHOWCASE参加者募集．国立西洋美術館と企業のコラボレーション．卒業設計日本一展2007．竹中大工道具館企画展ふたつ．上村三代　受け継がれる想い．2007イタリア・ボローニャ国際絵本原画展．川村記念美術館所蔵「巨匠と出会う名画展」．ル・コルビュジエ：アンビルト—未完の建築—．メルティング・ポイント展　27

月間の動き　平成19年6月分　30

入賞発表　第6回読者と選ぶ「建築と社会」賞
【論考部門】—なぜ六甲道駅南地区再開発事業は10年間で完成したか—住民の合意形成過程の検証—/有光友興．地方文化の源流を訪ねて—東海道47番目の宿・関宿—/嶋村明彦．終末医療施設（家）としての京町家復活/泉　紀世史・大坪欽彌・堀口利夫
【作品部門】—産業技術記念館10周年記念事業．西谷ふれあい夢プラザ．関西大学総合学生会館メディアパーク凜風館．県立西播磨総合リハビリテーションセンター リハビリ中央病院　31

表紙　企画・デザイン　高橋 善丸



作品風

設計・監理■
大林組

施工■
大林組

医療法人慈心会　咲洲病院



□療養型病院のカタチ

咲洲病院は大阪市港湾地区の一角に建つ病床数151床の療養型病院である。
医療法改正により変革期にある療養型病院はどうあるべきか？
クライアントと共有した問いに対して多様な答えを組み合わせることによって、あるべき建築のカタチを造りだした。
低層階には外来・診療部門、OP室等を配置し、一般病院である本院（医療法人慈心会あびこ病院）と連携することで療養型から一般型へスムーズに移行出来る仕組としている。また、管理諸室は将来病室への転換が可能な様に病棟と同じ平面形で設備も病室と同じ装備とした。
上層階の病棟階では機能性、フレキシブル性、そして療養環境としてのくつろぎをテーマにし、ダブルコリドー型の単純明快なプラン、そしてアースカラーを中心としたカラースキームを採用した。
外観のデザインは病院の顔としての清涼感、安心感を持てるよう極力シンプルな構成としている。外観を構成するボリュームは内部のプログラムをそのまま形態化し、エントランス側にはファサードに深みをつけるよう病棟階に必要な消防用バルコニーを集約している。
変革の波に乗る療養型病院のプロトタイプを実現した。

（神戸嘉也・田中克典/大林組）



エントランス



病棟階平面図　1：600



外来待合コーナー

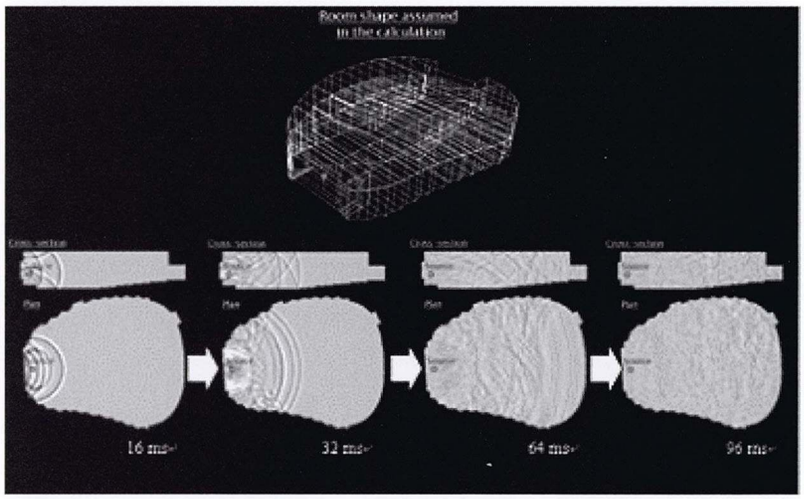
4床室

所在地 ――大阪市住之江区南港中2-2-8
敷地面積 ――3,102.09㎡
建築面積 ――1,184.69㎡
延床面積 ――5,888.33㎡
構造規模 ――RC造　B1、5F
工　　期 ――2006年3月～2007年4月
最寄駅 ――南港ポートタウン線・ポートタウン東駅
撮　　影 ――㈱伸和・相川

研究の風景

東京大学生産技術研究所

坂本　研究室



小規模ホールの３次元波動音響数値解析の例。音波の伝搬の様子を視覚化することで、室内の音の拡散の様子を知ることができる。

■はじめに

東京大学生産技術研究所は、工学のすべての分野にわたる100あまりの研究室から成り、坂本研究室は応用音響工学研究室として、建築・都市の中での音に関わる研究課題に取り組んでいます。1999年に以前の六本木の敷地（現国立新美術館）から駒場のキャンパスに移転し、無響室（二室）と残響室が移設されました。

生産技術研究所は附置研究所なので学部教育は行っていません。研究室には、工学系研究科の大学院生が所属し、日夜研究を行っています。また、建築環境工学分野でも音を専門とする研究室のある大学は多くはないので、他大学の４年生や大学院生が卒論・修論を書くために当研究室に所属して活動する姿も毎年のようにみられます。様々な場所から音に心惹かれて集まった人々の力で、迫力のある成果を発信し続けることを目指して研究活動を行っています。

■研究活動

［騒音の予測と制御］

静穏で快適な都市の音環境を実現するためには、騒音を適切に制御することが重要ですが、適切な騒音対策を考えるためには、騒音の発生と伝搬の様子を正確に把握しなければなりません。当研究室では、影響が広範囲にわたる道路交通騒音に重点を置いて、騒音の伝搬予測手法に関する研究に取り組んでいます。構造物が輻湊した都市部では騒音の伝搬が複雑となるため、騒音の予測が難しくなります。そのような場合に適用可能な方法として音の波動性を精密にシミュレートする方法（波動数値解析手法）の適用可能性を検討しています。この方法は、原理的に非常に大きな計算機資源を必要とします。そこで、主要な断面だけをモデル化して計算する方法の妥当性を確かめたり、効率的な計算方法を模索したり、といった研究を行っています。都市のレベルからやや範囲を狭めて、室内の音環境を静穏に保つ騒音対策手法の検討も重要です。建築物の騒音対策では、室周壁の遮音性能の確保が一番重要です。周壁の遮音性能を総合的に向上させる上でポイントとなるのが、換気口や窓・扉の召し合わせ部分に必然的に生じる隙間部分の遮音性能です。これらの隙間を伝搬する音の特性を把握し、効果的に外部騒音の侵入を防ぐ方策を実験的に検討しています。

［室内音響設計］

建物内部の室の音響性能を確保するための音響設計では、エコーなどの音響障害を防ぎ、室の用途に合わせた残響（吸音）特性を設計することが重要です。

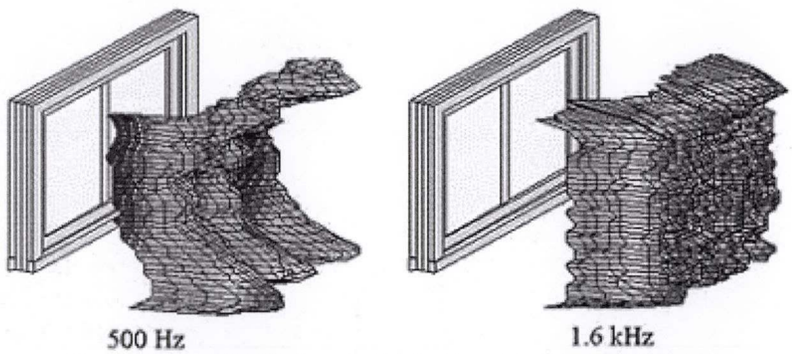
室内音響設計が特に必要な空間としてはコンサートホールが代表として挙げられ、計画・設計段階で適切な音響的処置を施すための予測手法について研究を進めています。音響模型実験は有用な手段の一つで、境界条件及び媒質の吸音などに関する相似則、実験装置などの開発、ディジタル信号処理の応用などについて研究を行ってきています。もう一つの有力な予測手法は数値解析による音響シミュレーションで、主に時間領域有限差分法による波動音響シミュレーション手法を開発して用いています。

音が主役ではないものの良質な音環境の確保が重要な空間として、公共空間や学校施設を対象とした室内音響設計についても研究を進めています。具体例としては、近年小学校で採用されることの多いオープンプラン型教室について、教室間の音の伝搬を低減するための教室の配置や仕上げについて、波動音響シミュレーション手法を適用して検討しており、実際の小学校の音響設計にも応用しています。

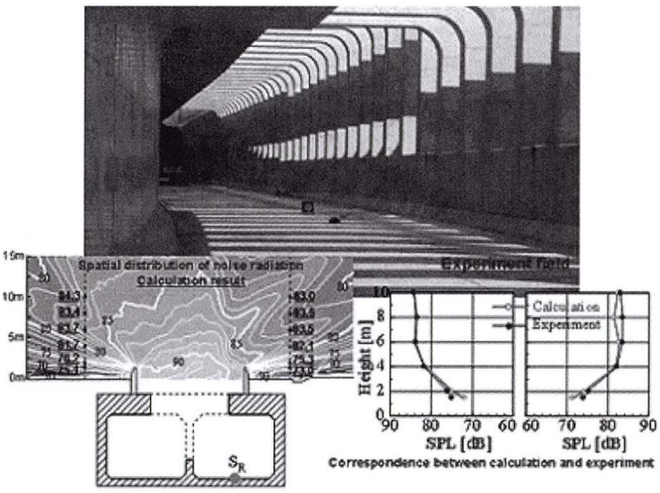
［音響測定法］

いろいろな音源からの音の放射特性や、室内外の音の伝搬を計測する技術は、私たちの研究にとって最も基盤となる技術です。

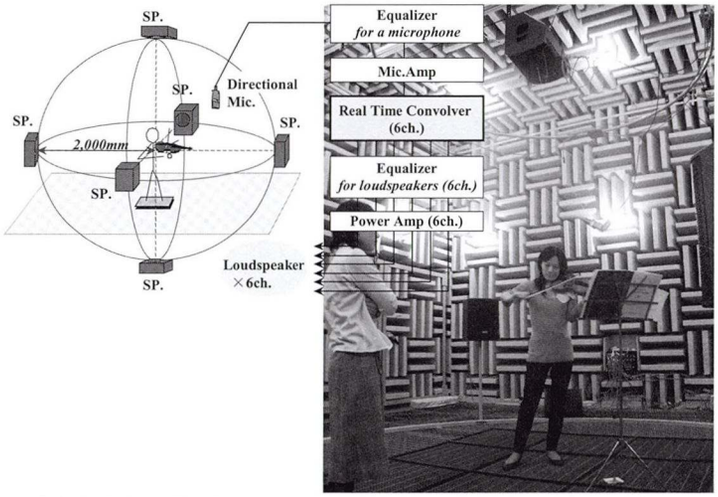

半無響室での窓面からの音響放射特性測定風景。



窓・サッシからの透過音パワーを音響インテンシティ法により計測した例。



半地下構造道路（写真）からの騒音放射特性に関する研究。グラフは実測結果と数値解析結果の比較。



無響室内三次元音場シミュレーションシステムを用いた音場評価実験。ホールの響きの特徴と演奏しやすさとの関係を調べている。

・音響インテンシティ計測法　音の測定は、単一のマイクロホンで音の基本的な物理量の一つである音圧を計測するのが一般的ですが、音の基本的な物理量として、音圧の他に音のエネルギーの流れを直接捉えた量である音響インテンシティを計る方法もあります。この物理量を得るには専用のトランスデューサが必要になりますが、音源からの放射パワーの測定などでは高い精度を得ることができますし、壁体の遮音性能の測定では音の透過を可視化することもでき、遮音構造の開発研究に非常に有効です。

・信号処理利用による伝搬特性の計測　屋外などの測定現場では、暗騒音のレベルが一般的に高く（つまり、「周りがうるさくて」）、十分な測定精度が得られない場合があります。うるさい現場では、周囲の音（暗騒音といいます）よりも十分大きなレベルの信号を音源から放射する必要がありますが、音源スピーカから出力できる音の強さには限界があります。そこで、音源信号を出す時間を長くし、信号処理技術を応用して等価的に大きな音源出力を得ようとする方法の有効性を検討しています。

［音環境の評価］

建築・都市の音環境を考える上で、設計目標を適切に設定するためには、音の物理的特性とその心理的影響を把握することが重要です。建築・都市空間では人はさまざまに活動しながら音と関わりあっており、聴覚の特性だけでなく人の行為との関係で音環境の快適性や良好な音響特性について知る必要があります。そのための研究としては、実験室内で三次元的に音空間を再現して行う心理実験（後述）と、実際の空間で行うフィールド調査の二つが主な方法となります。後者は、騒音測定、建築音響特性測定、観察調査、インタビュー、アンケートなどを組み合わせて、現状の評価や課題の考察を行います。これらの研究では、環境における人の行為や認知のメカニズムを理解した上で適切な心理実験手法や調査法を組み立てることが重要であり、このための基礎研究として、環境への適応、技能の獲得など人と環境との相互作用のメカニズムに注目した研究も行っています。

［三次元音場シミュレーション］

音の心理学的影響を調べる上では、コンサートホールの響きから環境騒音まで、さまざまな現実の音を実験室内に再現し、それに対する人の反応を調べる方法が有効です。音場再現手法の一つとして、直交三軸上に組み合わせた６本の指向性マイクロホンによって実際の音空間を収音し、無響室内に設置した６台のスピーカから再生する“６チャンネル収音・再生システム”を考案して、種々な心理実験に使用しています。

このシステムを用いて、鉄道駅やアトリウム、住居などの音環境について、会話のしやすさ、テレビ・ラジオの音の聞きやすさ、くつろぎなどの行為に対する各種騒音の影響を調べてきています。さらにこの原理を発展させて、コンサートホールの響きをリアルタイムに再現するシステムを構築し、ステージ上の演奏しやすさを調べる評価実験も行ってきています。プロ演奏家の協力を得て、音楽芸術と工学との架け橋となる研究成果を目指しています。

■終わりに

音は人の文化的・社会的生存に欠かすことのできない役割を果たしています。視覚人間が多い建築の世界で、目に見えない音の存在はその重要性を忘れられてしまいがちであることから、坂本研究室では音響現象の可視化や可聴化には特に力を入れています。設計者にもわかりやすく音響現象を可視化するソフトウェアの開発のほか、大学生はもちろん小中学生にも音響現象に親しんでもらうための教育ツールを作成し、科学イベントや博物館などで紹介する活動も行っています。



半地下道路からの騒音の放射特性の測定風景。



コンサートホールでの測定風景。



研究室旅行での記念写真。富士山頂にて。



まち　建築　ひと

gallery

リビングと外部空間

杉本季優

Kiyuu Sugimoto & associates

リビングと外部をどう関連づけるか?…多くは、周辺環境を手がかりにしています。

「開放型」

郊外の敷地や、上部の階にリビングを計画した場合に採用。 ……①

「中庭型」

市街地において比較的敷地が大きい場合に採用。……②

「テラス型」

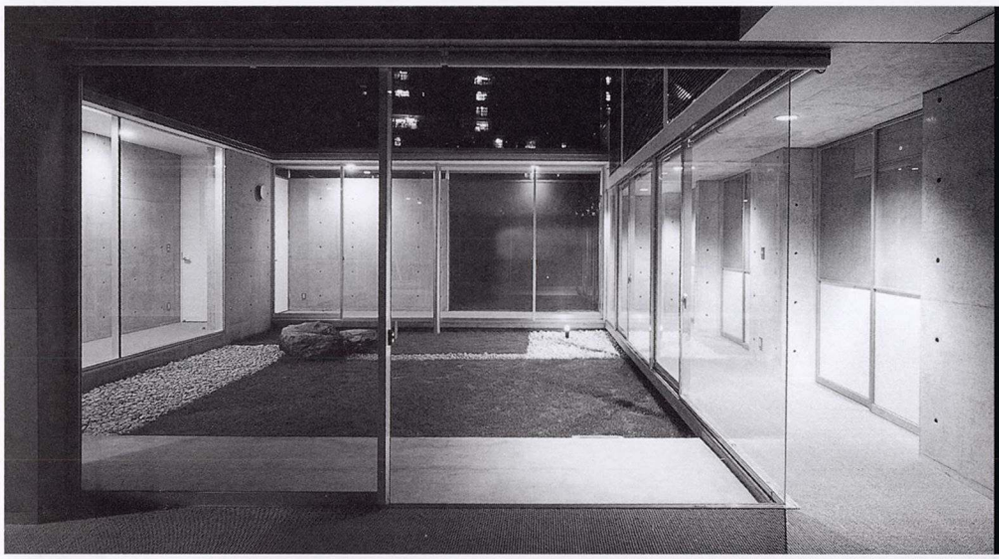
市街地においてプライバシーが確保されたテラスをまず配置し、リビングはテラスに対し可能な限りオープンなつくり方としています。……③

いずれも「楽しめる場所づくり」を目指しており、外部とリビングを連続的にしつらえることにより、多様なアクティビティーを生み出すきっかけとなることを期待しています。

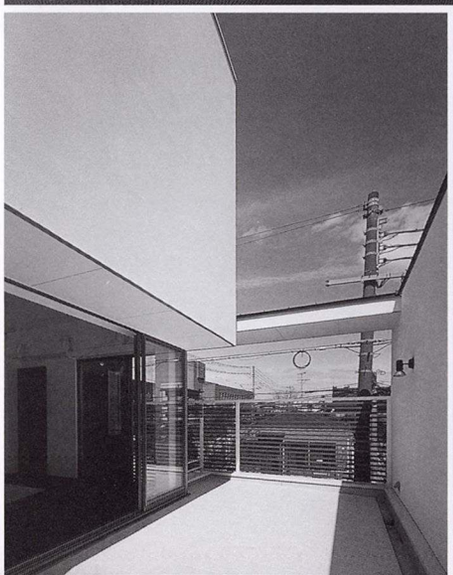
略歴

・1966年兵庫県生まれ
・芝浦工業大学工学部建築学科卒業
・2003年杉本季優建築設計事務所設立

企画編集：居内章夫(作品作風小委員会)









特集

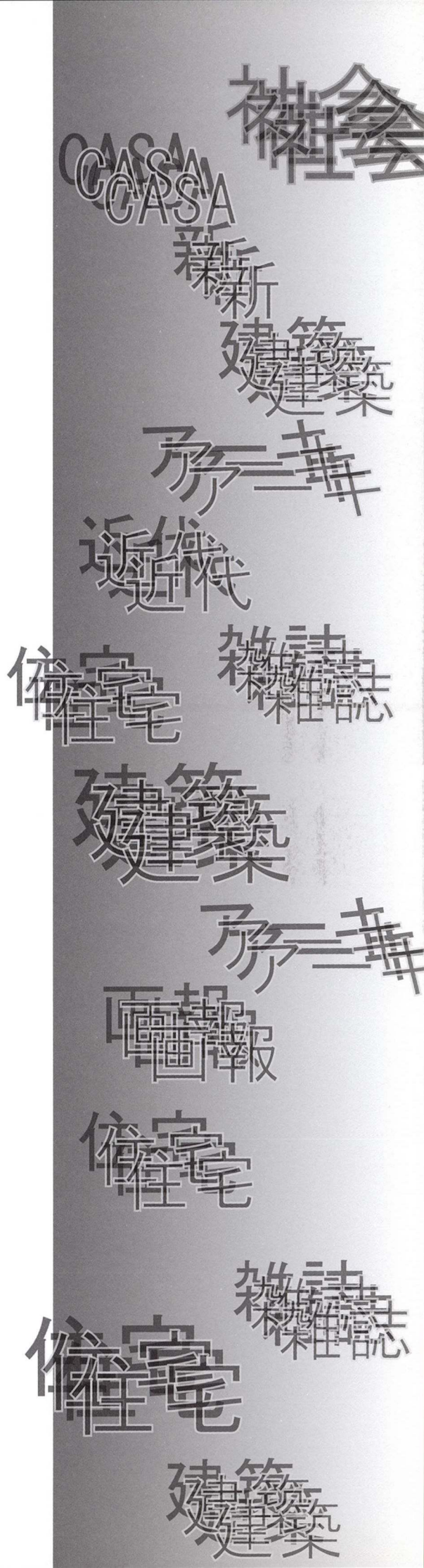
建築系雑誌が伝えるもの

従来、建築とは具体的な土地に建物を建設することであり、人々はその場所を訪れることでその建築に出会い、その空間を体験してきました。 しかし近代以降、メディアが発達することにより我々はその場所を訪れなくても、建築に出会うことが可能になりました。特に近年のネット環境の急速な発達によってその頻度はますます増大してゆく傾向にあるように思われます。また、作者側の意識もメディアを意識せざるを得ないような状況になりつつあります。

我々は知識として多くの建築を知っていますが、実際その場所を訪れて生の体験として知っている建築はその何割でしょうか？極端な言い方をすれば現代において建築がいかに認識されているかを考えるとき、その多くが雑誌や映像等の「メディア」を通じての認識であり、そのままその建築の評価につながってしまうことも稀ではありません。ともすれば、建築がメディアに載った情報によって実際の建築とは別の評価を与えられることも多くないでしょうか？

今回は情報の発信源としてもっとも身近な存在である「建築系雑誌」に焦点をしぼり、様々な角度から検証することで、「建築系雑誌」が担う役割について考える機会としたいと思います。

編集委員　荒木宏之



総論

建築系雑誌が伝えるもの／本多友常

各論

ではもっと大きい鯉を泳がせましょう　I.M.Peiと私　／東出清彦

示すこころと受けとる心／山岸　豊

アンケート

「a+u」／吉田賢次

「カーサ ブルータス」／吉家千絵子

「建築人」／徳岡浩二

「住宅建築」／平良敬一

「新建築」／大森晃彦

「新建築 住宅特集」／佐藤　勤

「日経アーキテクチュア」／山本恵久

「建築と社会」／設楽貞樹

企画　建築系分科会

総論

建築系雑誌が伝えるもの

本多友常

■ 作品であった時代 ■

ジャーナルは時代の鏡として、その変遷を映し出している。

1960年代から70年代にかけて、「新建築」、「建築文化」、「近代建築」、「SD」などを中心に建築思潮が形成され、それを学ぶことが建築であると感じるくらいまで、当時学生だった私たち団塊の世代に大きく影響を与えてきた。

その中で「都市住宅」が住の課題に深く切り込み、いわゆる作品主義にたいして生活の質、建築生産の在り方について、様々な角度からメッセージを発信していたことを、最近のように記憶している。

1960年代、日本は農山漁村の崩壊期とも言われるほど、都市依存的な高度成長を迎えていた。この時代の基調をなす建築家側の意識は、職能の誇りと啓蒙精神に駆り立てられ、使命感に満たされていた。

建築は社会を導き、空間の力が人の人生をも変えてしまうくらいの力があるのだ、という信念と自負に燃えていた。ひとつの磨き上げられた完成品は、必ずや人々の心を打つに違いないという確信もあった。そしてその根底を支える思想や主義が、設計方法論の是非や有効性として盛んに議論された。その基調はいわばイズムの時代とも言われ、モダニズムの思潮を根底としてメタボリズムをはじめポストモダニズムにいたるまで、建築表現の方法論と重ねられ、これをジャーナルが裏打ちする形で、建築界に影響を与えてきた。

そこには自動的に、いわば作品主義という建築にとっては狭義な、造る側の所作が確立されていった。設計者が建築を通して発言することは、周到に磨き上げられた‘作品’を世に送り出すことであり、その言葉は甘美な響きとして発注者の側からの期待とともに、社会全体の時代的基調を形成していった。

■ パッケージ情報として切り取られていく建築 ■

個の表現についての是非はともかく、それはスターシステムへの旅立ちでもあり、これを避けようとする意識もまたメディア的な態度として、建築家のスタンスの取り方が固められていった。

作家はその背景としての個の主張を使命とし、個性の発露はメディアの良質な素材として、流通の形式を補強した。

それは洗練された形の作品として、あたかも彫刻のような物的パッケージとして情報化されていった。それに付随して美しいプロポーションをもったディテールがクローズアップされ、いわば予定調和に向かってどれだけ完成度が上げられたかが、評価の大きな部分を占めていた印象がある。

この建築の伝達方法はメディアの特性に由来するものでもあり、まさに情報伝達における媒体の本質をなしている。

たとえばある映像が、砂漠の水平線上にはるか遠く、点のようになって移動する遊牧民の姿を捉えていたとしよう。そこでは情報の受け手は、無意識にせよ映像のクローズアップを予期し、何らかの出来事を期待する。やや誇張して言うなら、事件を待っている。

これは言葉が事物を命名することにより世界を切り取る作業に似ており、汗を流して行進する遊牧民の姿に焦点を当て、さらに顔面の皺(しわ)に接近することにより砂漠の雄大さが伝達される。しかしそれは常に他者である撮影者によって選択され、切り取られ、誘導された視野であり、画面の外にある電信柱がトリミングされていたなどという苦笑いの話は枚挙に暇が無い。

これは料理をしないと、情報は伝わらず、そこには必ず対象の変質を宿命としていることを意味している。これを裏返すと、変質させられなかった真の核心などというものなどは存在せず、メディアは善きにつけ悪しきにつけ、デフォルメを梃子(てこ)に時代形成の先端性を担っていることになる。

■ テーマの拡散と希薄化 ■

ここにジャーナルが拠って立つ視点と方法が明らかになってくる。

それはまず日常性の中に突出した出来事を捉えることから始まる。これは水平線の上にうごめく特異点を探し、クローズアップしていく作業に似ている。

次に類型的な現象の代表例をピックアップしていくことにより、現在起きている事

柄を浮き彫りにしていく作業であり、これはデータとしてのバックグラウンドを形成する。

もうひとつはニュース性を追うことであり、最新情報として新たに起こり始めている事柄や、時代的なテーマをいち早く察知し、伝達していくことにある。これはジャーナルがもつ創造的な側面であり、社会的な使命であるとも言える。

この課題発見の営みにおいて、建築が単に建築の生産にかかわるハードな側面だけではなく、その前提であるべき人々の生活や、社会の在り方と建築との関係に目を向けるべきである、という声は絶え間なく発せられ続けていた。

建築系雑誌は決してこれを黙殺してきたわけではない。むしろ編集に携わってきた人々は、ここにこそ仕事の意義を見出していた。しかしそれでも商業誌が受け持つ世界においては、売れ筋となるヴィジュアル系が優先される傾向は強い。

この声を建築界の分担として受け止めていたのは、学会や本誌をはじめとする各団体が発行する会誌や、同人誌などであり、その歴史は厚く蓄積されてきた。この背後には、単にジャーナルの編集者だけではなく、これを企画し展開する膨大な人々の英知が注ぎ込まれ、建築系の大きな世界が組み立てられてきた。

しかし現代において浮上してきている課題は、テーマが拡散し、それに呼応して内容の議論が希薄化してきているのではないかという懸念がある。

建築が技術の範疇を越え、時代の抱える課題と表裏一体の関係にあると認識した時点で、それは一気にテーマの拡散を抱えこむことを意味する。それは世界の様相を反映していることに間違いないが、全てがテーマになりうるということは、現代における建築的課題の核心を何処に求めるべきかが見えにくくなってきているのも事実である。

■ 思考停止のまだら現象 ■

情報化時代におけるメディアの革新については、既に無数の言説が交わされ、その多くは価値の多様化を指摘している。しかし本当なのだろうか。人間の価値観というものは生まれてから死ぬまでの短い一生において、それほど簡単に変わるものではない。生命に対する尊厳や、自由への希求や、他者への畏敬の念は、一人の人間のなかでそれほど激変するとは考えにくい。しかしそれを支えてくれる周辺状況が、人々の心の底にフィットしにくくなり、あるいは正面から取り組める状況が失われつつあることは間違いなさそうだ。つまり全員で共有できる問題意識が分散し、我がこととして実感をもって向かうことの出来る対象が不定形化し、戦うべき対象が見えにくくなっているのが実情なのではないだろうか。

もちろん時代的なテーマはいくつも挙げられている。「環境」、「エコ」、「まちづくり」、「景観」、「プロセス」、「保存と開発」、「情報」、「福祉」、「防災」、「セキュリティー」等々、これらは建築学会における各分化会の多さにも端的に現れている。それぞれに切実な問題であることに疑いは無い。ところが課題の細分化は、他者への無関心あるいは判断停止を招きかねない危険を伴っている。

現代が世界の出来事を瞬時に集められると考えるのは錯覚だ。 私たちは小さな頭脳の大きさを越えた容量の情報に直面し、ことの正否を他者の判断に任せざるを得ない状況に追い込まれている。それと同時に自分が入手した情報を上回るものがどこかにあるかもしれない。その不確定な不安に駆り立てられ、情報の海に溺れ、皮肉にも情報そのものに対する欠落感を確信するようになる。これは自己の判断に対する確信の揺らぎに通じており、他人（ひと）の話に揺り動かされやすくなることを示唆している。

もっとも現代はあまりにも忙しすぎて、逆にお任せの出来ない人々を心の病にまで追い込んでしまいかねない事態も否定しがたい現実としてある。

しかし確信の欠落感の連鎖によって導かれる外部化された判断力は、群衆を一つの情報のもとに操作しうる単細胞に貶めてしまいかねない。情報量の多さにもかかわらず、事あるごとにわずかな磁場がかけられると、簡単に影響されてしまいがちなことに、私たちは気づいていないわけではない。

この情報化時代における思考のまだら現象こそが、時代的課題設定を難しくしているといっても過言ではないだろう。

■ 地球環境という名の抽象性 ■

近年は、地球温暖化現象をはじめとする環境問題がクローズアップされている。

温暖化問題やエネルギー消費、ごみの分別処理をはじめとして、地球資源や環境問題との付き合い方が試される時代を迎え、人々は大きく目を開き始めている。その先にある環境の「持続性」に対する視点は、工学や建築を超えた文化・文明論につながっている。

この兆候は、わずか十数年前と比べたら、隔世の感がある。気候変動をはじめ、環境問題に対する人々の意識も大きく変わってきた。しかし地球規模の問題は、個人の身体性への直感としては分かりにくい。これは知性としての問題意識を必要とする。そのため関心を寄せそこなった人々に対する同調効果は、必ずしも大きく期待できるとは限らない。この課題意識と判断力における構造的な希薄化は、環境問題においてさえ、あるヒステリー状態が起こった時には、民衆は捏造された熱気によって、一気に単調な判断を下しかねない落とし穴が、いくつも待ち受けていることを認識しておかなくてはならない。

これは現代的課題が急速に複雑化、抽象化してきているためであり、ジャーナルはこれを身近な課題としてブレークダウンし、身近な問題として描き出していく役割を大きく担っている。

この点では冒頭に述べた作家主義的なジャーナルの編集方針は、商業誌においてもかなり変わってきており、課題発見的な編集方針に変化してきていることは評価すべきであろう。むしろ各種機関誌が、地域に根ざしたアイデンティティを弱めつつある気配が心配されるところである。

ジャーナルが時代の鏡であるということは、そこから発せられる警鐘が、ひとえに創造的な営みであることを意味しており、その時代形成の役割に大いに期待したいところである。

（ほんだ　ともつね／和歌山大学システム工学部、教授）

各論 1

では もっと大きい 鯉を泳がせましょう

I. M. Pei と 私

東出清彦

「建築系雑誌の写真は何を如何に伝えるべきか」「建築写真の担う役割」などが編集部からのテーマであるが、書き始めてみてあまりにも重すぎることが、わかってきたのである。日頃は、そういうことはあまり考えずに、個々の撮影に没頭しているだけである。

さらなる理由は時代の変革である。このところの急速なデジタル化の波は、表現においても技術においても分野を越えてとどまるところを知らない。それが故か否か、建築も写真も両々相まって軽妙洒脱を通り越して飽食の時代の反作用かともおもえる存在希薄がウリのような特集が組まれる。かとおもえば巨大開発プロジェクトでは容積率一杯のビルが同じような高さで何本も立ち上がり、スカイラインなどないのである。写真にすると屏風岩のようだ。このような風景が今後何十年も続くことになりかねない。大阪の御堂筋もついに超高層化に入るようだが、銀杏並木が生き生きとして、風通しが良く、変化に富み、全体の調和がとれた景観を期待したいものである。

ここでおもい起こすのは、20年前本誌70周年の記念号で、私は『大阪モダニズムの精華』という別冊を企画した。1920年代を中心に大阪に残る建築から26作品を選び、拙作写真により小冊子にまとめたのである。1980年代、大都市を席巻していたポストモダニズムの病的兆候群に我が目を疑い、一方で70年を経てなお、雄渾の名建築を再認識することによる、それへの対峙のおもいでもあった。

そして20年を経た現在その約1/3は存在しない。滅び行く建築の美を、写真に残す以外ないのである。

さて、私は、ひとつの建築作品に向き合うとき、あらゆる先入観を持ち込まず、無心になろうとする。学生のころ、下宿に寝転んでドストエフスキーのラスコーリニコフに心臓をえぐられるような感動に浸り、トーマス・マンの自伝的芸術論、真の創造への道は心は死んでいなければならないと語るトニオ・クレーゲルに心酔した遠い日々の残響のようなものを心のどこかでひきずっているからかもしれない。



MIHO MUSEUM（1996～2007年撮影）
アルシノエ像のある南館エジプト展示室へのアプローチ

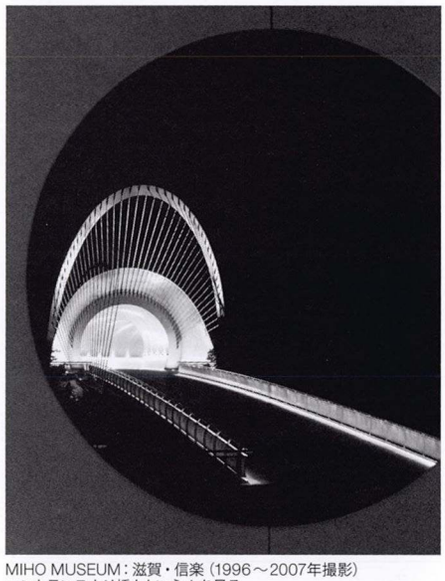
具体的な個別の撮影の中で、一人の建築家、I. M. Pei とのこの10年を振り返ってみたい。

1997年11月3日 MIHO MUSEUM のオープニングセレモニーでのこと。I. M. Pei は世界中から集まった知己との応対の中で、1年近くをかけたとはいえ40頁ほどの写真集の撮影をしただけの私をわざわざ探し出し会いにきてくれたのだ。満面の笑みと暖かみのある握手のなかで、80歳の建築家のオーラが全身を貫いた。そして身に余る賛辞とともに『今、北京で進めている建築が完成したらぜひ撮影してほしい。』と。これが I. M. Pei との初対面であった。



中国銀行本店：北京／鯉が泳ぐバンキングホール（2001年撮影）

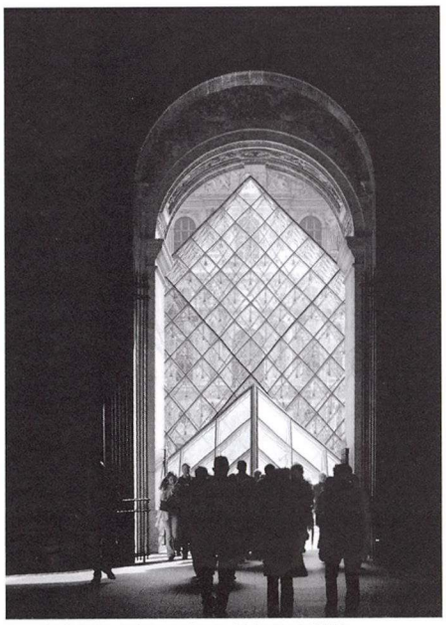
2001年6月23日。中国銀行本店（北京）



MIHO MUSEUM：滋賀・信楽（1996～2007年撮影）
エントランスより橋とトンネルを見る



90歳を迎えたI.M.Pei氏と写真集の打合せをする筆者（2007年4月）



ルーヴル美術館／ガラスのピラミッド（2005年撮影）

22階特別会議室。私はこの2日前に北京入りし小型カメラで400カットほどのロケ撮りをする。200枚のコピー写真を用意したものの、84歳の建築家を前に『もっとセレクトし直しましょうか。』という。I. M. Pei『いや、全部見たい。私は写真を見るのは多いほど嬉しい。』一枚一枚丹念なやり取りが続き、終日に及ぶ。

1階バンキングホールの中に、竹が植わり雲南から運ばれた巨大な石が配され、池には錦鯉が泳いでいる1枚がある。私はズボンをまくり上げ素足で池に入って、手前に鯉を入れようと頑張るのだが、数十匹はいるのにどれも小振りで素ばしっこい。金魚くらいの感じにしか写らない。

竹の青と鯉の緋色の対比が念頭にあり、つい『もっと、鯉が大きいとだいぶ違うんですがね。』と口を滑らせる。『わかりました。もっと大きいのを泳がせましょう。』I. M. Peiは真顔なのである。翌朝、フロアの責任者が、『Pei先生から錦鯉の指示をいただきました。残念ながら北京で手に入る一番大きいのが泳いでいます。これ以上は日本から輸入するしかありません。お待ちいただければすぐに手配いたします。』という。こちらは12日間の撮影日数を延ばすわけにもいかず、恐縮しつつ北京鯉でいくことになる。どんなに些細なことでもそれがより良い方向に向かうのであれば全力を傾けるのがI. M. Peiの仕事振りである。

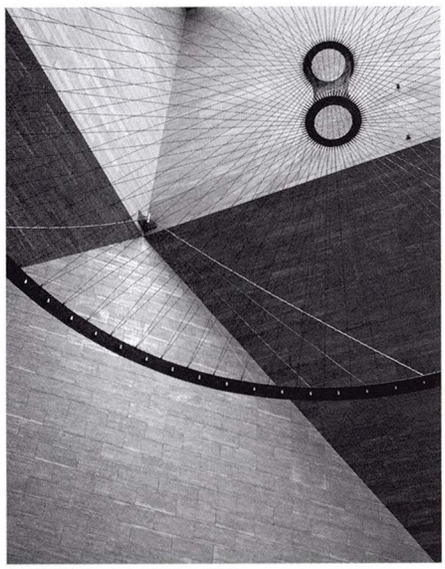
この10年、ニューヨークやルクセンブルグなどでことあるごとに人間味あふれる機微に触れる。文は人なりの如くI. M. Peiの建築空間は静謐、気品、自由の空気に満ち、この上なきヒューマニティを思わせる。今年90歳を迎え、かくも矍鑠（かくしゃく）たる姿は、いよいよただごとではないとおもうのである。

21世紀、コンピュータにより、世界も建築もさらに変化しつつある。そのうち、空中遊泳できる小型気球でも開発されれば、ピーターライスが、写真では我々の仕事は理解されないと歎いた部分もいくらかは前進するだろう。

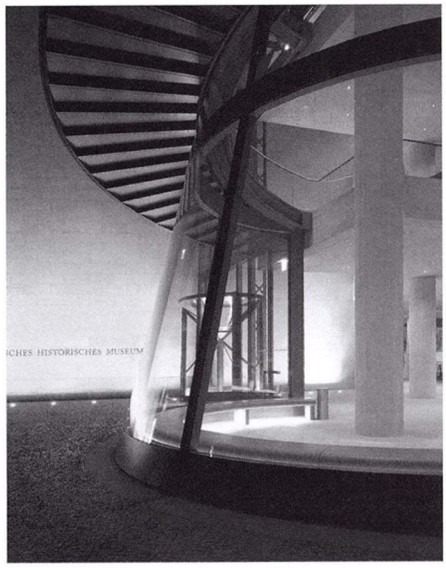
1917年I. M. Peiが生まれ、同じ年「建築と社会」が創刊された頃、パリではル・コルビュジエが「エスプリ・ヌーボー」を編集しマルセル・プルーストが『失われた時を求めて』の中で「写真」について真剣に考え始めていた歴史をおもうのである。

＊MIHO MUSEUM、中国銀行本店、ドイツ歴史博物館、ルーヴル美術館、MUDAM美術館はすべてI. M. Pei設計。写真は筆者。

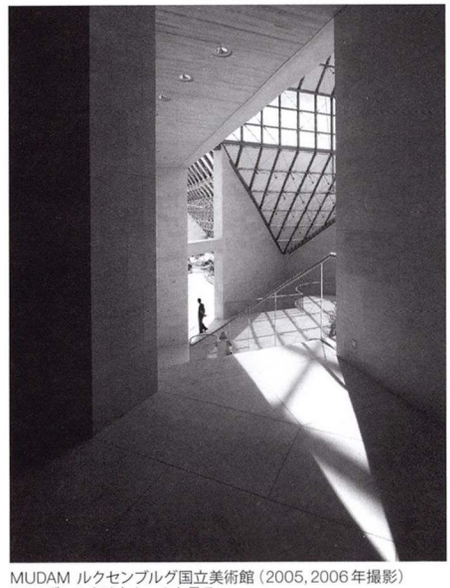
（ひがしで　きよひこ　写真家）



中国銀行本店：北京（2001年撮影）
バンキングホールの照明



ドイツ歴史博物館：ベルリン（2005年撮影）
ライトアップされたエントランス 夕景

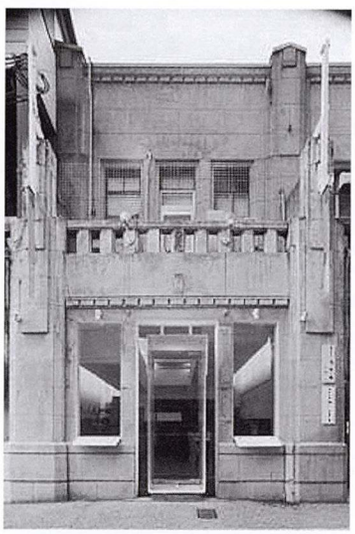


MUDAM ルクセンブルグ国立美術館（2005, 2006年撮影）
2Fレヴェルより大ホールを見る

各論 2

示すこころと受けとる心

山岸　豊



O-CHA CAFE（オチャカフェ）／長坂　大

こころが頽廃している昨今、本屋のおっさんに日本建築協会から「建築系雑誌が伝えるもの」という命題が与えられた。これまで“salon de TAIRYUDO”で出会った多くの人々から、さまざまなことをご教授いただいてきた私なりに、持論とはおこがましいが「自論」を話したい。

現在、建築にまつわる情報の取得には建築専門雑誌、一般誌の建築特集、WEB magazine等があるが、それらは単なるガイダンスであると考える方がよい。そこには情報発信者と受信者の気質の問題が発生する。発信者は重層的な情報発信を心がけてほしいし、また受信者には自己の人間形成が必須である。人間は活字や写真には弱く、それらにすぐ絶対性を感じたりする。しかしその情報はどこまで真実であろうか、それは擬似体験に過ぎず、理解したつもりになる危惧がある。

私はあえてここで受信者の気質を考えたい。最近、建築駆け込み寺に若人が設計や卒論などのことで相談に良く来るが、物事の方向性を判断するときに利己主義な考えをもとにする人が増えてきたように思う。それも頭の中だけのバーチャルな思考形態である。何かが違う！　物寂しさや危惧が残る。何が違うのか……。そんなことを考えるうちに、諸先輩達が書籍や真建築で建築家の“こころの叫び”を発信されていることに気づかされた。そこでここでは、そのうち３つの書籍、３つの建築から、それぞれの建築家の「こころのかたち」を考察しよう。

■連健夫著『心と対話する建築・家』から：施主との対話、心理・デザインプロセス・コラージュからヒントを得て「意味の建築」を紐解き設計する。建築は施主との創造的コミュニケーションのプロセスと共に、ヴァナキュラー的視点が大切である。「プロセスのある物語建築」「心と対話する建築」である。

■上田篤著『日本人の心と建築の歴史』から：建築には複眼的な建築史学が必要である。日本における建築とは先人たちが培ってきた日本文化の“かたち”である。森田慶一氏の指摘する「強・用・美」プラス「聖」の、日本伝統建築の根底に流れる思想の再認識および継承が、広義の意味で現代の頽廃した世の中を是正することに繋がるのである。

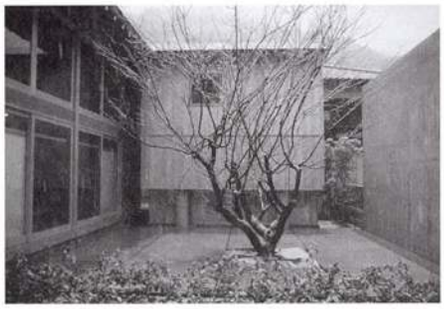
■安井清著『伝統建築と日本人の知恵』から：人生のなかでの不思議な縁で、多くの先人たちとの対話と空間体験から大工や職人たちに蓄積された高い技術と英知を学び、また建物の魂を観ることができた。このことを後世の人に伝えたい。

建築作品のほうでは作者のコメントもともに紹介する。

■長坂大最新作『O-CHA CAFE（オチャカフェ）』作者のコメント：「このプロジェクトでは、明治の西洋様式建築に対してどのような姿勢を取るかが問われます。ここではまず、ファサードに取り付けられた過剰なメーターや配管類をできる限り取り除いて当初の外観の基本構成を再現した上で、それに新しい「部分」を取り付けました。空間の「小さな進化」、あえていうならこれが空間構成のコンセプトです。これは、私が建築をつくる時にいつも考えていることです。都市の中にひとつの建物をつくること、また自然の中にひとつの建物をつくることは、地表面でつながったひとつの世界をたかだか少し進化させることなのだと。ここでの新しい進化は白い鉄板トンネルです。付け加えた部分が部分としてはっきりとわかるようにしながら、これと既存建築とのコラボレーションが新しいイメージを生み出すことをめざしています。＜略＞」

昨今、近代建築と現代デザインのコラボには大変興味深いものがある。真のリニューアルとは入魂のフォルム・ファサード（作者の人格）を壊すことなく増改築することである。この事例は不詳作者と長坂大氏の見事な“かたち”、人格と人格の融合である。ぜひこの空間でお抹茶に舌鼓しながら作者と対話し癒しの時を過ごしたいものである。

■西垣安比古最新作『梅壷の家』作者のコメント：「＜略＞居間からは背後に高さ４mのコンクリート壁をひかえた壺庭の梅を、高窓越しに見ることができる。一方、それと直交して配置部から梅の根本が眺め



梅壷の家／西垣安比古

られ、その背後の茶、樫の植え込み、アプローチ、近隣庭園の緑の梅木が、一方では屏風のようなコンクリート壁の前に立つ姿で見え、それは能舞台の松を髣髴させる。これに対して寝室からは、壺庭の地盤面が強く強調され、梅が大地に立つことが強く感じ取られるようになっている。同じ梅がこのように違った姿で見られることによって、「すまい」の空間に深みを与えることができたと考えている。」（新建築住宅特集2005年12月より転載）

この氏の処女作には美しくも悲しい後日談がある。この住宅を企画設計された時には西垣氏の奥様には死の宣告がなされていたのである。雑誌に取り上げられたとき氏は微塵もその話をされなかった。今思うと最初に竣工写真を見せていただいた時、縁側から見た借景と庭の厚手コンクリート塀と梅木に波動を感じたのは確かである。お解かりであろうか、この梅壷には、もう一つの深遠なる見方がある、それは西方からみる壺庭である。梅壷の庭からは西方には何の障害物もなく大宇宙に繋がっているのである。この住宅はご夫婦にとって「永久の終の棲家」である。後日、氏にお送りした手紙の一部からその時の心境を察して頂きたい。

偶然必然

奥様とはお電話で二、三度お声を拝聴させていただいたことがあります。お声からは優人と察しました。

貴殿の魂のこもった空間（うつわ）で過ごされた時間は、さぞ笑顔に満ち足りていたと思います。それは夫婦の永久の慶びであったのではないでしょうか。

貴殿の“愛妻へのこころの普請・こころのうつわ”が雑誌に掲載され、評価された理由が遅まきながら解かりました。これぞ真の建築家の“すがた”であると思います。

私も最近、多くの友との別れがありましたが、それは非常につらく、悲しいことではありますが、我らを取り巻く、マクロな宇宙時間から考えるとさほど変わりはないと考えるようになりました。

しかし、貴殿のご心境をお察し申し上げます。どうぞお身体をご自愛ください。

「優妻の　笑顔が満ちる　うつわの普請
貴殿のこころが　温妻を懐く」　悲心合掌

■吉村篤一氏最新作『押小路の町家「幹翠庵」』作者のコメント：「施主との話し合いの中で、先人たちが構築した町家遺伝子を壊すことなく、「町家・日本建築の方向性」の中で設計し、今までにはない新しい町家を造りたい。しかしあまりかけ離れたことや脈絡のないことはしたくない。施主の理解が必要である。」

「＜略＞新婚のご夫婦が住むこととなり、立て替えるのではなく京町家のよさを活かして手を加え、現代生活がスムーズにできる町家にしたいとのことであった。＜中略＞この町家は表のファサードはほとんど変わらず、内部はその特長を活かして現代性を備えた新しい「京町家」に生まれ変わった。また次の世代までその伝統を継承していくことができるであろう。」（新建築住宅特集2007年４月より転載）

この作品は町家のDNAを継承した増改築の一例であるが、既存の出格子から逸脱することなく車庫のオーバードアに改良したところに「吉村篤一ワールド」が存在する。吉村氏がいつも言っておられる「伝統とは創っていくものであり、フォルムやファサードは己の姿・人格である」という信念の実践である。



押小路の町家「幹翠庵」／吉村篤一

以上、六師の共通項は“こころとこころの共感・融合”の重要性を説いていることである。建築とはバーチャルの世界ではなく、その場に立ち「五感＋こころ」で習得する世界である。著名なル・コルビュジエ氏（東方への旅）、磯崎新氏（若き日のインド旅行）、原広司氏（集落の教え）、安藤忠雄氏（『建築と庭』の実測を西澤文隆氏と共にしていると聞く）達も若き日には多くの空間体験をしている。これは現場主義でしか体得できない感性である。また正確な情報を習得するのに大切なのは和辻哲郎の思想――建築物の風土的歴史、歴史的風土の考察であり、複眼的に作者のこころを掴むことである。すなわち、空間体験とは先人との“こころとこころの対話”であり、真の情報は己の足でしか稼げないのである。それでは我々はどうしたら諸先輩のような感性――審美観、洞察力、建物と対話できるこころ――を養えるのだろう。建築を創造するにはどこへ基盤をおいて行うべきだろう。その糸口の一つとして、次の「学問のススメ」（五つの法則）がある。**1．スケッチのススメ**：コメント付きのスケッチの蓄積。**2．ドキュメント作成のススメ**：卒論など人生の節目に作成。**3．日本伝統文化の習得のススメ**：お茶、お花、俳句・和歌、和楽器など日本人の心の体得。**4．施主とのコミュニケーションのススメ**：設計者はどちらを向いて作業をするのか。**5．方程式作成のススメ**：己の人生の方向性を確認する意味。君の人生の指針となるだろう。ちなみに私が50歳のときの方程式は3p（process,policy,philosophy）+3w（when, whose, what）+oneI（if）=practiceである。

我々は建築界から「温かい社会」を構築したいものである。

現代は　情報過多の　よき時代　取捨選択
真の情報
入魂の　建築物が　つつみこむ　示すこころと　受けとる心

本屋のおっさん　山岸豊　拝

特集：建築系雑誌が伝えるもの

アンケート

現在国内で発行されている建築系雑誌は同人誌等を含めると、どれだけ存在するのかは不明だが、代表的な雑誌に焦点をあて各誌編集長に対し、編集内容についてのアンケートをさせていただくことにした。

■アンケート項目

①貴誌の編集理念についてお聞かせください。
②掲載建築作品の選定基準についてお聞かせください。
③掲載建築作品の選定時には現地でその建築作品を実際に見て判断しますか？
④建築作品を掲載するにあたって一番大切にしていることは何でしょうか？
⑤掲載した作品の追跡調査をおこないますか？
⑥貴誌がターゲットにしている購買対象者層についてお聞かせください。
⑦掲載する建築写真の選定はどなたがおこないますか？
⑧貴誌の中での建築写真が持つ役割についてお聞かせください。
⑨社会に対して、建築雑誌のもつ影響力とはどのようなものでしょうか？



2007.7月号
発行所：㈱エー・アンド・ユー

『a+u』

副編集長

吉田賢次

① 『a+u』は、世界中の建築に関する情報を、日本国内のみならず世界の建築界に伝える、和英バイリンガルの月刊誌です。世界中の煩雑な建築情報をわかりやすく紹介するために、毎号特集形式を組んでいます。建築に携わる方、建築やデザインに興味を持っている方に少しでも役立つよう心がけています。

② 一定の選定基準はありません。

あえて言えば、読者が求めている情報と編集部が伝えたい情報を考慮して掲載を決めています。

③ 可能な限り見るようにしています。

また、世界各国に情報ネットワークがあり、アドヴァイザーや編集協力者とともに世界の新鮮な建築情報を収集して判断しています。

④ 建築の概要だけではなく、建築の背景や建築家のコンセプトも伝えることです。

⑤ 場合によります。

⑥ 『a+u』は、約110カ国で読まれています。読者層は建築関係者、特に意匠系の方が半数以上を占めています。

⑦ 編集部全員。

⑧ 建築を紹介する上で多くの情報を持っている重要な媒体だと思います。ただし、写真表現だけに頼ること無く、様々な表現方法で誌面を構成するよう心がけています。

⑨ 雑誌に限らず、多くのメディアは情報を発信し続けることで社会とつながっています。弊誌も編集スタンスを崩すこと無く、発信し続けることが大切なのではないかと思っています。 （よしだ　けんじ）



2007.8月号
発行所：㈱マガジンハウス

『カーサ ブルータス』

編集長

吉家千絵子

① 『カーサ ブルータス』は建築の専門誌ではありません。衣食住と旅を4本の柱とした、‘ライフ・デザイン’マガジンです。イタリアのファッションブランドが第1号店を東京に作ったり、世界の3星レストランが多数日本に進出するような現象からも分かるように、衣と食を楽しむことに関しては、日本人は世界の有数レベルになっている。しかし、住に関しては、まだ遅れているので、それを衣食のように楽しめないか、という視点から出発しています。ですので、パリで評判のスイーツも、青森の新美術館も同じように気になる人が想定読者です。

衣食住に旅を加えたのは、「グローバルに衣食住の楽しみを伝えたい」との考えと、さらに、世界中の物が手にはいる日本人にとって、「建築は最後に残された旅の目的」ではないか、という意図からです。

② 「建築を楽しむ」が雑誌のテーマです。まず、見に行ける建築物であるか否かが大切です。アクセスの難しい住宅に関しては、集合住宅は定例企画を設けていますが、個人住宅は年に1度の特集でまとめて紹介をして、好評を得ています。

③ 特集テーマやその頁のテーマにより、異なります。特集で大きく扱うものに関しては、スタッフの誰かがほぼ訪れています。基本的に見るにこしたことはない、とは思っていますが、毎号で100カ所以上のスポットを紹介しているので、現実的には「見に行くことは無理だけれどぜひ紹介したい」建物がしばしばでてきます。スタッフが見に行けるか否かより、世界や日本で話題の建築は必ず載っていることが大切だと思っています。

④　特集のテーマにより異なります。建築家名、ロケーション、用途や目的、完成日時など、建築専門誌より、幅広い切り口がでてくることが、一般誌である小誌の特徴だと思っております。

⑤　計画段階で紹介することもままあるので、そのような場合は完成時にも掲載するように心がけています。

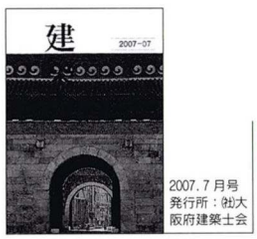
⑥　①の通りです。実際に読者の３割くらいは何らかの形で衣食住に関する仕事をしていらっしゃる方のようですが、メインは衣食住と旅に関心の高い一般の人です。

⑦　編集部です。写真家とデザイナーの意見を参考にしています。

⑧　これも特集テーマにより、大きく異なります。

⑨　小誌により１人でも多くの人が名建築を体験してもらえれば、と常に考えています。建築そのものが持つ力こそが社会にインパクトを与えるのであり、そのよい架け橋になることが大切と思っています。

（よしいえ　ちえこ）



『建築人』

建築情報委員長

徳岡浩二

①　会報誌『建築人』は、本会会員を対象とした活動案内等の周知を主軸として、迅速かつ臨機応変に記事掲載に応えるものでなければなりません。建築情報提供の手段として本誌とHPを活用し、それぞれの役割を明確にして会員・一般建築士ならびに大阪府民などへの広報活動を強化することを目的としています。

②　現在選定基準を設けていませんが来年度よりコンプライアンスに配慮して検査済証取得確認及び大阪建築コンクールと連携して質の高い作品掲載を目指して検討中です。

③　以前は事務局、委員が現地の実態を把握していましたが最近は写真提供を受けるようになり確認が出来ていません。来年度より現地視察することを再検討中です。

④　作品の質と受けて側のニーズに応じた資料性を大切にするためWEB情報との相互補完関係の構築を予定しています。

⑤　行っていません。

⑥　会員および建築に関心のある一般市民です。

⑦　以前は編集委員が行っていましたが現在は提出者に委ねられており、作品によって差異が生じ統一感に欠けるため改善策を検討中です。

⑧　会員の建築への関心を高めデザイン能力や技術的向上を目的としています。

⑨　建築は社会の鏡であり、社会情勢、倫理観などを体現しますがそれに異を唱えるのもまた建築であります。（とくおか　こうじ）



『住宅建築』

編集長

平良敬一

①　本誌『住宅建築』はサブタイトルに「文化としての住まいを考える建築専門誌」と謳っています。建築はこれまでも芸術であるといわれてきましたが、わたしは建築は生活文化の営みであると考えたほうがより適切な定義ではないかと考えます。生活文化は日常性のなかに非日常性として、日常性にはない＜型＞を創造して日常性と非日常性が混成する秩序をつくってきました。

日本の生活文化を端的に示す言葉として「市中の山居」という言葉があります。戦国時代の都市の市民が都市のなかに生活しながら、そこに山里の草庵を取り込んで楽しんだ空間のことでした。言いかえると市中＝日常であり世俗のことであり、山居＝非日常であり、脱俗であり、「市中の山居」とはすなわち日常と非日常の結合としての「生活芸術」でした。近代化のなかでこの「生活芸術」は崩れ去りつつあります。そしてその特徴である日常性と非日常性の関係性をその内部に含みもつ世界が失われてきました。

20世紀のモダニズムがかかえていた難点についての反省をしつつ、21世紀のモダニズムの生成の中に「市中の山居」の生活芸術が力強く蘇っていくことを期待しているところです。

②　世の中には建築と建築でないものがはっきりとあると思っています。本誌はそれを「文化としての建築」という言葉にこめています。モダニズムを通過するなかで身についた合理性を越えて美しさを求めています。理想は高く、理念にかかげた「市中の山居」に適うまでに至らなくても、わたしたち編集者の感性に響いてくるもの、言葉につくせないものですが編集の一人一人の自由裁量です。

③　現地で作品に接して判断することが原則です。

④　住まう人の住まうことの思想が明瞭な形で感じとれることです。設計者の設計思想に住まうことの感性が読み取れることは必要ですが、住まいとしての十分条件として住まう人の構想の実現、その実態を見とどけること。

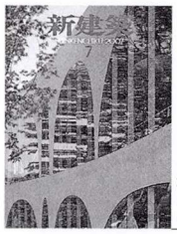
⑤　追跡調査という余裕はありませんが、その作品のその後を心にかけていることはあります。特定の作品に再度出会う機会が度々あります。調査というほどのことではなく。

⑥　設計に専門的に携わる建築家を中心に、工事にかかわっていく職人と工務店等の技術担当者たちです。しかし理念のところで述べたように、本誌は住まいづくりに携わる人びとの集団がつくる生活文化の質のレベルにねらいを定めているわけで、どうしても設計者中心であらざるをえないところがあります。それは超えねばならない限界とは考えていますが……。

⑦個々の編集担当者個人

⑧本誌の中で建築写真が果たす役割は、本誌の理念を効果的に実行していく上で、つまり住まいのもつ芸術的美的表現を迫るカメラアイは絶対に不可欠である。

⑨社会にどれだけの影響力があるか、わたしたちにはわかりません。（たいら　けいいち）



『新建築』

編集長

大森晃彦

①　『新建築』の創刊号は大正14年８月号です。大正６年９月創刊の『建築と社会』に遅れること５年、日本建築協会の設立者のひとりでもある武田五一のバックアップによって、故吉岡保五郎が創業、創刊しました。1974年に刊行した臨時増刊「日本近代建築史再考／虚構の崩壊」の中で、当時の社長の吉田義男が、吉岡の出版理念を紹介しています。すなわち、「建築という分野における、学問、芸術の意義、価値を信じ、出版という創作をもって記録にとどめ、そのことに終生の生き甲斐を持つ」と。この「出版という創作をもって記録にとどめ」という言葉は、創刊82年となる今も響いています。

②　弊誌の主要な内容は「作品」の紹介ですから、常に幅広い取材を心掛けています。「選定基準」というものが明確にあって掲載作品を決めてはいません。基準という言葉に拘るならば、いつも新しい「基準」を求めているともいえるでしょう。「こんなものを掲載するの」と言われるような作品に意味を見出し、「なるほど」と言っていただける頁をつくることは痛快です。「基準」を意識されるのは読者の側ではないでしょうか。取材をする私たちは、Something／これには何かがある、という感覚を大切にし、撮影する写真、テキスト、そしてページレイアウトに、それをできる限りとどめることを心掛けます。それぞれの作品に込められたものを読み取り、あるいは新たな基準を見出すのは読者であると考えます。

③　編集担当者が実物を拝見し、設計者にお話をうかがうことを基本としています。事情により見ることができない場合もありますが、担当者が資料を読み込み、設計者にお話をうかがいます。その上で、編集担当者と編集長がディスカッションし、取材方針を明確にします。それぞれの作品のポイントは何か、どんな写真が撮れるか、期待できるテキストは、一般図以外にどのような図面があるか、などです。その上で掲載時期はそれぞれの号の構成を考える中で決定します。撮影は弊社写真部のカメラマンを派遣することになりますが、撮影前にカメラマンと打合せをするほか、できる限り編集スタッフが撮影に同行し、カメラマンと協働するようにしています。

④　特集というと、弊誌の場合いくつかの作品をテーマで括ることが多いのですが、建物名称と設計者名をタイトルとして始まるひとつひとつの作品紹介も、それぞれが個別の特集であると考えています。ひとつの建築が実現するまでにはさまざまなドラマがあり、いくつかの奇跡があるはずです。１号の中に20作品あれば、20の特集があるというわけです。それぞれの特集、つまり作品紹介は、その写真の取り方や、テキスト、ページレイアウトの表現方法を臨機応変に考えていきたい。何をどのように伝えるかをその都度考えていきたいと思います。ただその時に、カメラマンや編集者の意図が前面に出ることなく、読者がダイレクトに作品や作者の思いに触れることができる頁づくりを努めています。

⑤　たとえば、環境性能をテーマとしている作品について、計画時に予測されたものがはたして実現されているかを検証する連載をやっています（連載：３年目の地球のたまご）。また、現代集合住宅考える上での重要な作品の現在の姿をルポする企画も興味深いものでした（現代集合住宅のオリジンを探る）。保存改修、コンバージョンなどによって建築に新しい意味や文脈が与えられるの事例も数多く取材しています。時間は建築にとって重要な要素すが、普段はなかなか見えてこないものではないでしょうか。保存改修、コンバージョンなどは、まさに時間が目に見える瞬間です。その瞬間を捉えていきたいと思います。このことは（「追跡調査」とは意味が異なるかもしれませんが）、新しい作品を取材掲載する際に、既存の都市との関係を明確にすることに繋がります。ひとつの敷地の建築の更新は、都市にとっては他を保存した改築でありコンバージョンです。

⑥　マーケティング的な分類で行けば、専門誌あるいは業界誌であり、専門分野の人々、あるいは建築業界に顔を向けている雑誌ということになるのでしょう。現実に雑誌を支えていただいているのは、そのような分野の読者の方々と広告を出稿していただいている多くの企業の皆様です。ただ、一般の方が建築に興味を持ち、アクセスしようとするとき、書店で弊誌を手にすることも少なからずあるはずですし、他分野から建築の専門誌として参照の対象になることもあるでしょう。社会に対する建築のフロントエンドの位置にもあると意識しています。

⑦　写真の選定以前に、どのような写真を撮影するかということが重要。ない写真は選べません。撮影前の建築と設計者へのしっかりした取材と何を撮影のポイントとするかの撮影者との打合せが必要です。仕上がった写真は設計者にご覧いただき、お考えをうかがった上で、ページレイアウトを制作する中で使用する写真を選定します。弊誌の場合は、設計者への取材から、さまざまな調整・打合せ、撮影立ち会い、ページレイアウトの制作、校正までひとりの編集担当者が行い、撮影は弊社写真部が行います。写真の選定は、設計者、撮影者とのコラボレーションであるといえます。

⑧　きわめて重要です。一枚の写真の力を信じているということでしょうか。風にそよぐ梢のざわめきや漂う空気までも、写真に写し込むことができると思っています。ですからまずは、なんとしても風景の中に建

築がいかに建ち上がっているかを、そこに込められた建築家の思いと共に伝えるような写真をものにすることを考えます。そんな写真を軸として頁を構成することが理想です。

「メディアに載った情報」と「実際の建築」にギャップがあり、「メディアに載った情報」がひとり歩きして建築に正当な評価がなされていないことがあったとすれば、ひとつには決定的な一枚が撮れなかったか、あるいは、編集側の理解がまったく見当違いであったためでしょう。

⑨ 残念ながらきわめて小さいと言わざるを得ません。6番の項目でお答えしたとおりです。 （おおもり　あきひこ）



2007.8月号
発行所：新建築社

『新建築 住宅特集』

編集長

佐藤　勤

① 『新建築住宅特集』の母体である『新建築』誌の創刊号の表紙には「住宅の研究雑誌」と銘打ってありました。それは大正モダンの中で、都市社会の発展と共に個性が重視され、個人の住宅が重要な意味をもちだした時代でした。そうした時代の要請の中で『新建築』誌は創刊され、後年その意思を受け継ぎより発展させるために本誌は創刊されました。つまり、集積された「建築」の知識と経験を母体に、住空間にまつわる先端情報を送り続けるというのがその理念となります。

② 選定の明確な基準はありません。しかし、掲載された建築作品そのものを巡って、あるいはその設計者が展開する建築論や設計論を巡り、読者から広く議論が生まれることを期待しています。それはすでにわれわれが共有している建築的な体験を超えるものであることを期待していますので、そうした可能性をどのように、そしてどれだけ感じさせてもらえるかというのが「選定」の際に求めることとなります。

③ 日常的な取材活動において、可能な限り現地での取材を心がけています。こと住宅においては図面や写真だけで、すべてを理解することは困難です。しかし、諸事情により現地での取材が困難な場合は、設計者への十分なヒアリングを行い補足することとなります。また現地を拝見することなく掲載をお願いした場合、弊社専属のカメラマンが撮影を行う際に担当編集者が同行をしたり、撮影終了後の写真をもって設計者と綿密に打ち合わせを行うようにしています。

④ 社会の価値が多様化するなかで、住空間にさまざまな期待が寄せられています。たとえば芸術的な意義や学問的な成果、あるいは資産価値や個人的な欲望の充足とその多様さはこれまでの建築界の裾野をはるかに超える広がりをもってきました。あるいはそれは建築家という職能の意味の変貌を意味するのかもしれません。そうしたことを前提としたときに、まず第一に、編集部の意向のみを強く反映するのではなく建築家とのコミュニケーションをそのスタートラインとしています。そこから多様な価値に応えることができる情報発信を行うこと、そして時代に即した柔軟な発想を大切にしています。

⑤ 作品そのものへの追跡調査は、特別なケースをのぞいて行っておりません。

⑥ 本誌は建築専門誌ですので、主な購買対象者は建築実務において設計行為を行なっている方となります。一方で、ハイアマチュアとでもいえる建主の方も対象としています。

⑦ 各作品には編集担当がそれぞれおります。編集担当は建築家と事前打合わせを行い、それに基づき弊社のカメラマンと現場に赴きます。撮影終了後は改めて建築家と打ち合わせを行い、その後誌面構成を行います。誌面づくりを、設計者との相互理解を理想とするコラボレーションと考えていますので、写真の選定はそのプロセスが決めていくこととなります。

⑧ 動画が日常的になり、デジタル化が進む今日においても、現場を確実にとらえてきた一枚の写真は、時間を超え、われわれが認識することができる価値を凌駕する力をもちます。たとえばそうした力を誌面に注ぎ込んでくれるのが建築写真です。

⑨ 現状では決して大きなものではないかもしれません。しかし、建築雑誌という枠を少し広げてみたときに、一般誌での設計者の取り上げられる頻度や内容を見ると、社会の中での建築自体の価値はこと住宅というビルディングタイプに関していうと面白い時代を迎えつつあるのかもしれません。 （さとう　つとむ）



2007.7.23号
発行所：日経BP社

『日経アーキテクチュア』

編集長

山本恵久

① 設計・施工、あるいは発注などの立場で建築づくりにかかわる方々に対し、質の高い仕事を成し遂げ、質の高い建築をつくるための情報を総合的に提供すること。そのときに、建築に対する一般社会からの期待や、利用者・生活者の視点を見失わずに情報を取捨選択（編集）し、質の高い生活環境の創出に貢献すること。（以上、編集方針の一部です）

② まず、「作品性」（作家性）を否定することはしていませんが、優先することもしていません。編集部では、特定の文脈以外では「作品」という言葉を使わないことが了解事項になっています。

諸々の計画（プログラム）面や技術面での独自性・新奇性（時に実験性）はポイントになります。発注者・運営者との応答をはじめ、その建築のライフサイクルプロセスの中に読者の参考となる点を見いだせるかどうかも重要です。掲載時には、発注

者・運営者や利用者・居住者に取材することを原則としています。独自性・新奇性がどう機能しているか（どう受け入れられているか）を「知りたい・伝えたい」という編集部側の関心が大きな動機づけとなってきます。

③　主要な建築については、担当デスクなどが事前に見るようにしています。住宅など、何度も訪問することが難しいものの場合は、設計者から受けたプレゼンを判断材料とする場合もあります。

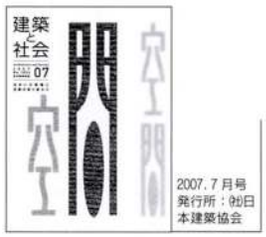
「作品としての出来・不出来」を問題とする雑誌ではないため、運営・利用状況や発注者の考え方などを取材する価値があるかどうかを判断できればよく、事前の現地検分は絶対条件ではないと考えています（掲載を決めた後、改めて現地取材を行いますので）。ただ、ニュース性がやや弱いときなど、意匠的な好悪が判断に全く影響しないわけではないため、「写真だけでは判定できない（現地を見たい）」といった結論に達する場合もあります。

⑤　追跡のポイントは様々ですが、利用開始後、時間のたった建築を取材する企画は“売り物”となってきました（完成時に掲載したか否かにはかかわらず）。

⑥　「建築設計事務所や建設会社に所属し、意匠・構造・設備にかかわる設計・監理者を軸とする。なかでも現場第一線に居る30歳代、40歳代の一級建築士の資格保有者を主要ターゲットとする」「施工、調査・計画、積算・見積もり、建物管理などにかかわる主要技術者（一級建築士など）や、不動産・デベロッパーなど発注者側に居る建築技術者、および経営管理層をカバーする」といった想定です。

⑨　読者の方から“普通の良質な建築（や建築設計者）”にもっとスポットを当ててほしい、との声が届くことがあります。しかし、弊誌も含めて、“特殊（あるいは先鋭的）”な事象をセレクトしなければ商業誌としては成り立ちにくい事情もあるわけです。結果、多様かつ複雑な建築（をつくる人）の世界が整理されてしまい、実像が伝わっていない。といった意味で、マイナスの影響力を行使してきたことは否めないと感じます。（弊誌には「作品掲載」以外の要素が多く、様々な観点から事象を追ってきたつもりです。ただ、予約購読制の専門雑誌のため社会に直接訴求する回路が欠け、これは課題の一つと認識しています）

（やまもと　よしひさ）



『建築と社会』

編集委員長

設楽貞樹

①　本誌『建築と社会』は社団法人日本建築協会の機関誌であり、大正6年に創刊されました。日本建築協会は本年3月に創立90周年を迎え、国土交通省所管の公益法人中では最も古い歴史を持っており、建築関係各部門の連携協力によって、建築界全般の進歩発展を図るとともに、建築を通じ広く社会に貢献することを目的としている団体です。

誌名の『建築と社会』もその活動目的を表現するものであり、創刊以来1023号（本年6月号時点）の伝統を誇っています。

また協会の構成員が、学校、研究機関、設計事務所、建設業、電気・管工・設備施工業、建材業など建築に関するあらゆる分野の個人、団体を会員に擁していることも大きな特徴です。

したがって建築の視点だけにとらわれることなく、幅広く“社会に対しての視点”を常に持ち続けていることが本誌の特徴であり、編集理念でもあります。

②　高い作品性を持ち、建築関係の各分野から参加する幅広い会員にとって紹介するに値するものであり、2頁または4頁での写真中心の誌面校正となるため、グラビアの対象としての適正があると判断されるものを選定基準としています。

“社会に対しての視点”という意味から、社会的な関連の少ない個人住宅や、限定した人しか見ることができない建築等は掲載対象としての優先度が低くなります。

③　計画段階（もしくは着工前）の資料（新建築調査表）をもとに選定を行うため、現地での確認はしません。判断に窮する際は、状況により図面類や直近の写真などを資料請求し、再度選定および判断を行います。

④　機関誌という性格上、流行や新奇性、話題性だけに目を奪われることなく、他のグラビア系雑誌での掲載実績などにも左右されずに、建築関係の各分野から参加する幅広い会員にとって、情報として提供される事が有意義であること。また、作品掲載は会員の作品発表という側面を色濃く持っていますので、本誌の中における掲載写真の品質はきわめて重要であると考えています。会員の作品記録として掲載意欲が湧く質の高い印刷物とするために、表現力のある紙質の選定、色彩の色校正等に時間とエネルギーを費やしています。

⑤　選定委員会としては行いません。

⑥　社団法人日本建築協会の機関誌であるため、読者の大多数は会員です。一部、会員外購読者（個人、研究団体、図書館など）があるもののけして多くありません。

⑦　誌面構成を含めて設計者が行います。選定委員会および編集委員会から誌面内容に関する意見などは出しません。

⑧　会員および活動が西日本中心となっている実態から、設計・建設業界の元気さを表すものであり、会員に刺激と活力を与えるものでありたいと考えています。

⑨　“社会に対しての視点”を常に意識して編集にあたっています。社団法人日本建築協会の活動の柱として位置づけられた機関誌であり、“社会的影響力”には当てはまりませんが、いい特集記事企画、いい作品紹介等は会員に対する広義のサービス向上につながり、会勢拡大のためにも最重要と考えています。

（しだら　さだき）

「建築と社会」誌

特集一覧●1986~2007

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1986 vol.67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり―I― ●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり―II― ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―＊	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台一仮設の魅力に学ぶ―ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第38回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと窺	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音―騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江―その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会―80人の眼―＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綴じる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法―パートII―	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	●時間	●私の空間作法―会員作品― ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境―近未来に向けて今できること― ●大建設計―作品特集1996~2001―	●建築の力都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法―会員作品―	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心―パート2―	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●湊町リバープレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて～サステナブルエンジニアリングの現在～	●私の空間作法―会員作品―	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋―この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える―	●サスティナビリティ～次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン～	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ―	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー～建築の主観的価値について～	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法―会員作品―	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯～心地よさを求めて～	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法―会員作品―	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法―会員作品―	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質～光と影のはざまで～	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー～エネルギーをたくわえ、有効利用する～	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…～構造が未来へつなぐ夢～	●私の空間作法―会員作品―
2007 vol.88	●光り輝く京都の景観まちづくり	●学校新時代	●東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作	●創立90周年記念―この10年、これからの10年	●あそび考	●こだわりが創る住まいのカタチ	●住まいの設備と空間の移り変わり	●建築系雑誌が伝えるもの	●建築基準法等大改正（予定）	●第54回青年技術者（予定）	●ガラスを考える（予定）	●楽しい構造の世界（予定）

＊は欠号

440

法令コーナー

京町家の耐震診断・改修の促進に向けて

籾井太計司
京都市都市計画局建築指導部建築指導課担当課長

はじめに～都市居住文化の粋・京町家の保全・再生のために～

京都の歴史と文化により育まれてきた京町家は、まちづくりやまちなみ景観の貴重な資源であるだけでなく、都心居住を支える重要な住宅ストックである。京町家は、都心部に約28,000軒（平成10年度調査、都心部４行政区）存在している。近年、これらの京町家が店舗や住宅として再生される事例も多く見られ、その価値が再認識されつつある。

これらの京町家は戦前に建築されたもので、耐震性能が不足している場合が多く、耐震性を向上させることが重要な課題である。

この京都の貴重な歴史的資産である京町家を、将来にわたって良好に保全・再生していくために、京町家の耐震化を積極的に支援する取り組みを進めている。

京町家の耐震化の問題点

京町家などの伝統的建築物は、建築基準法に規定されている一般的な木造建築の工法と異なるため、適切な耐震診断、耐震改修の手法が十分に確立されていなかった。

平成10年に建築基準法改正により導入された限界耐力計算は、変形性能を評価する計算手法で、京町家などの伝統構法による建築物に適した耐震性能評価手法である。しかし、その難解さ等の理由からあまり普及していないのが現状である。

これまでの取り組み

平成15年度に国補助金を活用して、「京町家の耐震性確保のための改修工法マニュアル策定調査」を行った。その結果、限界耐力設計法が京町家の構造特性に適した有効な手法であることが検証できた。

また、平成17年10・11月に兵庫県三木市で行われた京町家の実物大の振動台実験（文部科学省のプロジェクト）においても、限界耐力設計法の有効性が確認された。

さらに、平成17年度には、日本建築構造技術者協会（JSCA）関西支部に委託し、「京町家の耐震診断及び補強設計のための限界耐力計算の簡易計算手法の開発等に関する調査研究」を行った。

これらの調査研究等を踏まえ、一般の建築士などにも活用可能な限界耐力計算法による「京町家向け耐震診断手法」を整備し、今年６月に、この耐震診断手法に習熟した「京町家耐震診断士」を育成することを目的に、JSCA関西の協力を得て、京町家耐震診断士養成講習会を開催した。

この診断手法の整備及び講習会の開催と平行して、京町家の所有者をはじめとする、一般市民向けのリーフレット「京町家　耐震診断・改修の手引き」の作成に取り組み、今年６月から配布している。

京町家に適した耐震診断手法（「京町家向け耐震診断手法」）

(1) 京町家の構造上の特殊性

在来の一般木造建築物に比べ、京町家などの伝統構法による建築物は、それほど大きな耐力は持たないが、大きな変形性能を有しているという構造上の特性を持っている。

したがって、在来の一般木造建築物に適した従来の壁量計算を中心とした耐震性能評価法では、京町家などの伝統的建築物の耐震性能を十分に評価することはできなかった。

(2)「京町家向け耐震診断手法」（限界耐力計算法の普及型）の概要

①「京町家向け耐震診断手法」の意義

京町家の構造特性に適合し、かつ現行の建築基準法に適合した耐震評価手法である限界耐力計算法は、非常に難解であった。

このため、一般の建築士にも活用できるように、分かりやすく利用しやすい診断手法の整備が必要であった。京町家に用いられている伝統構法に適した耐震診断及び補強設計のための限界耐力計算の普及型計算手法を整備することにより、多くの建築技術者が利用できるようにし、京都市独自の都心住宅である京町家の適切な保全・再生を図り、良好な市街地環境と都市防災の向上を目指している。

②「京町家向け耐震診断手法」の特徴

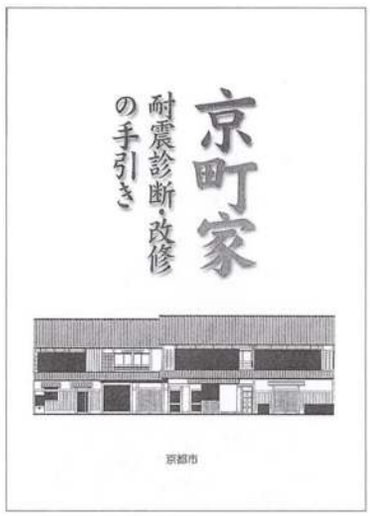
従来、コンピューターで計算していた応答計算について、建物の特性値（耐力係数、減衰定数）を応答計算シート（図表）上にプロットすることにより、応答値を算出することができる。

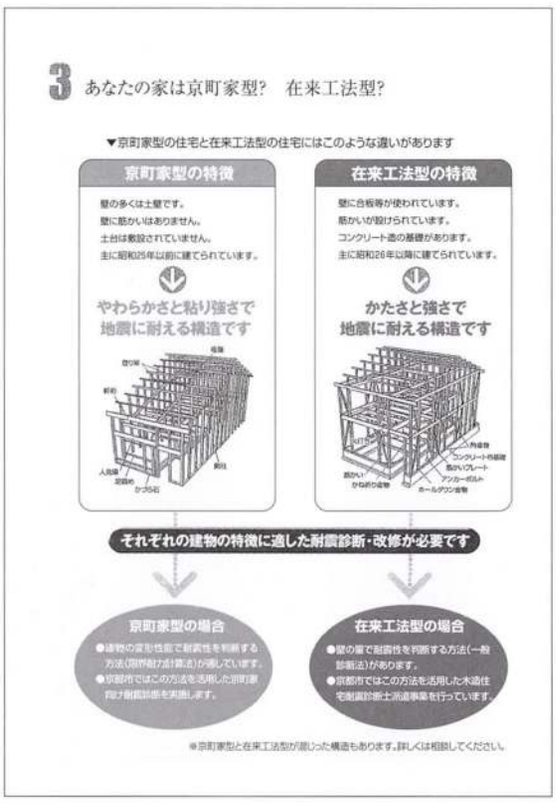
この図表による応答計算により、今までより容易に応答値を求めることができるとともに、図表という視覚的に分かりやすい方法を使うことにより、京町家の所有者などにも計算結果が理解しやすいというメリットがある。

今後の取り組み

今年９月から、京町家の所有者の希望に応じて京町家耐震診断士を派遣するとともに、京町家耐震改修助成事業を実施し、京町家の耐震化を積極的に支援していく予定である。

（もみい　たけし）





366

設備の頁

CASBEEでSランクを取るためのメニューとノウハウ

—(仮称)梅新第一生命ビルディング—

篠島隆司

㈱竹中工務店大阪本店設計部課長代理設備担当

「(仮称) 梅新第一生命ビルディング」は、大阪の玄関口「キタエリア」と「御堂筋エリア」を結ぶ要所に、二つの敷地を一敷地とする区画整理事業として計画された、地域の活性化を目指す環境配慮型のオフィスビルである。北側に位置する露天神社への南門線は廃道するものの、歴史ある露天神社の参道機能は公開空地として確保することで歩車分離がなされ、安全で快適な参道空間を形成した。

CASBEE（建築物総合環境性能評価システム）は、2003年に、政府支援のもと国際的な基準をめざして産官学共同プロジェクトとして組織されたJSBC（日本・サステナブル・ビルディング・コンソーシアム）において開発された、建築物に関する環境性能評価を総合的に行うためのシステムである。

各自治体においてもCASBEE評価を確認申請時に義務付けるようになり、大阪市では、2004年から評価を行っているが、本建物は、2005年に事務所ビルとしてCASBEE大阪初のSランクとして公表された。

基本設計時のCASBEE評価

CASBEEの評価は、環境品質・性能（Q）が高く、環境負荷（LR）が低いほど高評価となる。Qは、Q1：室内環境、Q2：サービス性能、Q3：室外環境、LRは、LR1：エネルギー、LR2：資源・マテリアル、LR3：敷地外環境に分けて評価される。

本建物では、建築主の環境配慮に対する取り組みもあり、基本設計時点から様々な環境配慮設計を計画した。

- ダブルスキンによる外皮性能の向上 (Q1)
- 約40㎡ごとの冷暖房フリー個別空調 (Q1)
- 給気口と排気口の距離を十分確保 (Q1)
- OAフロアあり、電気容量50VA/㎡ (Q2)
- 空間のゆとり (階高4.1m、天井高2.8m) (Q2)
- 十分な耐震性・制振装置導入 (Q2)
- 電力本予備線引き込み、地上階に電気室 (Q2)
- 受変電、空調室外機の増設スペースあり (Q2)
- 周辺環境に応じた建物の配置、形状等 (Q3)
- 熱負荷抑制（*PAL*値基準値の24％減） (LR1)
- 擬音、節水型便器による水資源保護 (LR2)
- 既存建築地下躯体の再利用 (LR2)
- 防振装置等設置による騒音・振動防止 (LR3)
- 外壁による反射光の影響なし (LR3)
- 屋上緑化等ヒートアイランド対策 (LR3)

基本設計時の評価を**図1**（左）に示すが、Aランク（BEE＝2.3）の予想であった。近年、入居テナントの環境に対する意識も高まっていることから、建築主からSランク取得の要望もあり、ランクアップを計画した。

CASBEEランクアップの手法

基本設計の建物の形状や基本性能を詳細設計において変更することは困難であり、設備を付加することでランクアップを目指した。

本計画では、LR1における設備システムの効率化は満点であり、その他の項目から選択した。付加設備として、Q1の光・視環境における照明制御の採用、LR1の自然エネルギーにおける太陽光利用自然採光システム、ナイトパージ、クールチューブの採用、太陽光利用、太陽熱利用、LR1の効率的運用におけるBEMS等の管理システムの導入が挙げられたが、新規性や効果を考慮し、クールチューブ、太陽光発電、BEMSを採用した。

また、採用することでQとLR両方に効果のある項目があり、節水器具や雨水利用：Q2信頼性とLR2水資源の保護、健康被害のおそれが少ない材料：Q1空気質環境とLR2低環境負荷材料、が挙げられるが、これらも採用した（節水器具は基本設計時から採用）。

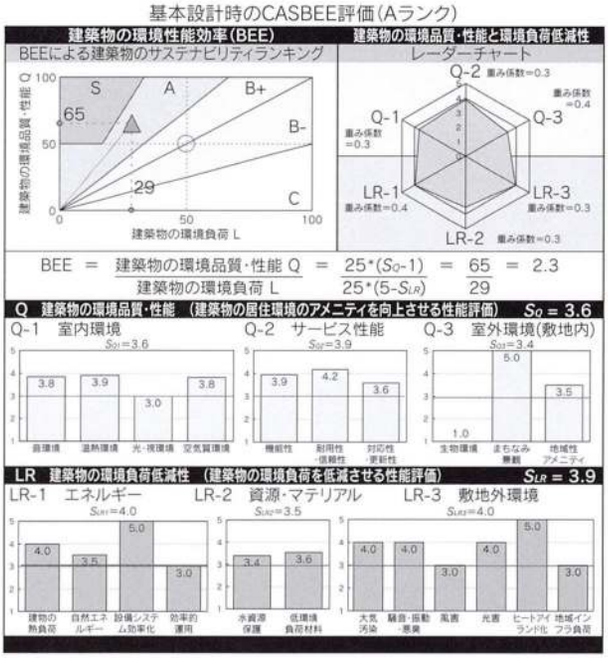
さらに、Q2信頼性における電話局からの引き込み２ルート化およびLR2低環境負荷材料における再生建築資材採用を行った。

上記の項目を加え、大阪市と協議し、公表された評価を図１（右）に示す。最終的にSランク（BEE＝3.2）の評価を受けることができたが、どの項目を採用するかのシミュレーションを繰り返した結果であり、Sランク評価を取るのは容易ではないと感じた。

CASBEEは環境性能を評価するツールの一つであるが、行政、建築主、設計者が一体となって環境配慮に取り組む指標として、高評価の建物は価値が高まると考えられる。今後も、基本性能として周囲環境への配慮や高効率設備の採用を満足した上で、自然エネルギーの採用や低環境負荷材料の採用などを行い、環境配慮設計に取り組んでいきたい。

（しのじま　たかし）

基本設計時のCASBEE評価（Aランク）





Sランク取得のための検討

- Q1：F☆☆☆☆材料の全面使用
- Q2：雨水利用（地上緑化散水用）の採用
- Q2：電話局からの引き込み2ルート化
- LR1：クールチューブ
- LR1：太陽光発電（5kW）
- LR1：BEMS等エネルギ消費量の管理システムの導入
- LR2：雨水利用の採用
- LR2：再生建築資材の採用（3品目）
- LR2：健康被害のおそれが少ない材料の使用（4品目）

Sランク評価（CASBEE大阪公表）

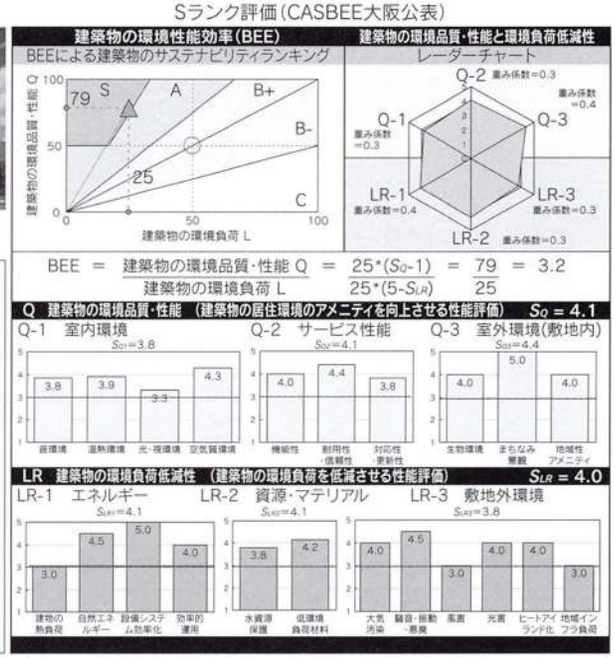


図1　Sランクを取得したポイント

247
新建材の頁
日本建築協会建材委員会

はりまかせ

株式会社サワタ建材社
〒661-0951 兵庫県尼崎市田能5丁目8番1号
TEL：06-6491-0677　FAX：06-6941-0699

鉄骨梁用耐火工法の紹介

耐火被覆工法においては、耐火性能、部位、仕上に応じて従来から各種工法が使い分けられている。中でも、耐火ボード類を耐火被覆に用いる工法は、仕上仕様の選択の幅が広がるために広く使われている。この場合、耐火ボード類の下地に軽鉄を施工することになるが、施工時火災安全性と仕上り精度の面等で多少なりとも問題をかかえていたことと思う。

今回は、従来の軽鉄に替わり、H型鋼鉄骨梁に簡易に取り付けられる金具と軽鉄と強化せっこうボードを組み合わせた耐火被覆工法「はりまかせ」を紹介する。耐火認定も取得済み（一部見込み）である。

はりまかせ工法の特徴

1．H型鋼梁の耐火被覆工法として

(1) 施工時の火災危険性を低減

ボルト・ナットで梁に固定する本工法は、従来の軽鉄工事のような溶接を伴わないため、施工時の火災危険性を低減できる。また、職人の溶接ヒューム、粉塵等による健康被害も低減できる。

(2) 仕上り精度の向上

はりまかせ専用金物により、H型鋼の反り、施工誤差等を気にせず容易に垂直、水平のレベル調整ができ、仕上り精度も向上する。

(3) 施工が簡便・工期を短縮

はりまかせ専用金物で垂直、水平を出し、ボルト・ナットで固定し、JIS軽鉄下地を金物に取り付け、強化せっこうボードを軽鉄下地に取り付ける。施工が簡便であり工期も短縮できる。（図1）

(4) コストの削減

施工能率が高いため工賃（人件費）を圧縮できる。金物のコストを考えても、トータルコストを削減できる。

(5) その他

アスベストを含まない強化せっこうボードを用いる。H型鋼を傷つけずに取り外しが可能なため、リフォーム対応が容易である。面材を使うため仕上材の幅が広がる。

2．H型鋼梁・柱への仕上下地工法として

本工法は、耐火被覆工法に限らず、H型鋼の鉄骨柱・梁に対する軽鉄下地工法としても利用できる。この場合は、面材として強化せっこうボード以外の選択も可能である。耐火性能以外の特徴はそのまま当てはまるので、一般仕上用の下地としても広く採用できるものと期待される。

耐火認定の取得

図2(1)，(2)のコ型（3辺被覆）の場合の表1の2タイプについて、㈱日本建築総合試験所の評価を得て、国土交通省の認定番号を既に取得している。なお、認定は強化せっこうボードの組み合わせに限定されている。

図2(3)，(4)のL型（2辺被覆）の場合も、既に試験所の評価を得て、近く認定番号を取得できる見込み（6月時点）なので問い合わせされたい。

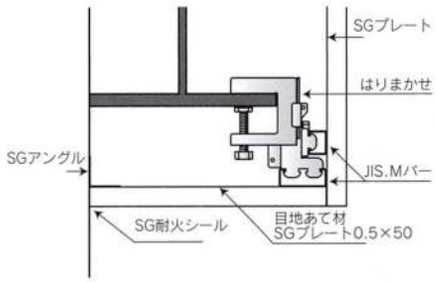


図1　はりまかせ専用金物取り付け例

サワタ建材は施工店として責任施工が可能であると同時に、メーカーとして部品の供給もできるので、各種場面で検討いただけるものと思われます。　（菅　知史／建材委員）

表1　認定番号

区分	名称	認定番号
SG-1（1時間耐火）	強化せっこうボード被覆／鉄骨はり	FP060BM-0173
SG-2（2時間耐火）	強化せっこうボード重被覆／鉄骨はり	FP120BM-0174

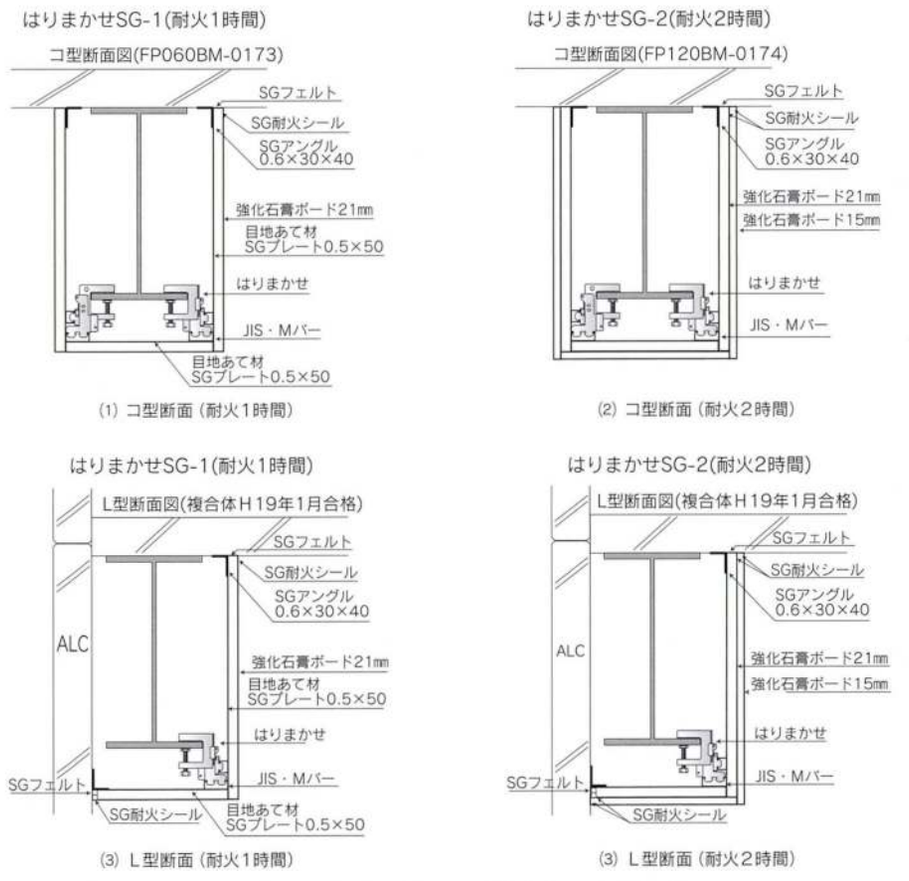


図2　はりまかせ工法の概要（(3)、(4)は認定見込み）

お知らせ information

▶京都国際デザイン会議 クムルス2008を前に

2008年３月27日(木)～31日(月)、国立京都国際会館と京都精華大学において、世界最大規模のデザイン・美術系大学連合組織「クムルス」の国際デザイン会議が開催される。海外40カ国からデザイン・美術系の教職員、デザイナー、デザイン関係者が200名以上集まるが、この国際デザイン会議を前に、デザイン美術系大学の学生を対象としたコンペを実施する。

■国際学生デザインコンペ作品募集

「クムルス」加盟校の学生と、日本の芸術・デザイン系大学、大学院、専修学校の学生を対象とし、“デザインの最終的ゴールは「しあわせ」にある”というコンペの主旨に沿って学生の視点から画期的、挑戦的、革新的提案を求める。

応募部門　• A部門 for ECOLOGY「地球と共に生きる。そして…」
• B部門 for TRADITION「伝統を活かし伝える。そして…」
• C部門 for SAFETY「人や都市を守る。そして…」

応募分野　グラフィック／プロダクト／インテリア／テキスタイル／クラフト／環境／建築／メディア／映像…

応募期間　2007年７月23日～９月28日必着

審査員　高松伸（京都大学・建築家）
須藤玲子（テキスタイル）ほか

賞　金　グランプリ「しあわせのデザイン」賞１点100万円、ほか各部門賞と企業インターンシップ賞

応募の詳細はhttp://www.kyoto-seika.ac.jp/cumulus/を参照。

▶建築環境デザインコンペティション実施

これからの建築・都市機能の方向性を探ろうとする、東京ガス㈱主催「建築環境デザインコンペティション～建築と設備のトータルな調和を求めて～」は、21回目を迎える。

今回の課題は「身体(からだ)と頭脳(あたま)を鍛えるコミュニティモデル」。新しいコミュニティ形成の核となる施設を、新しいアクティビティを期待する意味を込めて「コミュニティモデル」と呼び、この施設に適した環境や設備のあり方の提案を募集している。

登録　2007年10月５日(金)―当日消印有効―
http://kenchiku.tokyo-gas.co.jp/から応募登録。官製ハガキかFAX(03-3818-6742)で登録する場合「建築環境デザインコンペティション」と明記し、所要事項を書き添えて、新建築社内のコンペティション係へ。

提案　平面・配置・断面・設備システム図とその基本的考え方の、透視図もしくは模型写真、その他詳細図、あるいは簡単な説明文。縮尺は自由。
中判ケント紙に図面を収める。青焼き、CAD、鉛筆、着色、写真貼付は可。ただし、ディスクでの応募は不可。

提出　2007年10月15日(月)までに、新建築社内「建築環境デザインコンペティション係」(〒113-8501　東京都文京区湯島2-31-2　TEL 03-3811-7101)へ。

審査　伊東豊雄（伊東豊雄建築事務所代表）ほか７委員

賞金　最優秀賞１点150万円、優秀賞３点各50万円、佳作10点各20万円

詳細は、建築環境デザインコンペティション事務局(㈱建報社内、TEL 03-3818-1961)へ。

▶ビオトープ管理士試験実施

平成19年度「ビオトープ管理士」試験は、９月に全国15会場で実施される。

日　時　2007年９月30日(日)

会　場　札幌・秋田・仙台・郡山・東京・新潟・長野・金沢・浜松・名古屋・大阪・広島・徳島・福岡・鹿児島

手数料　１級13,000円、２級9,000円

申込み　2007年８月17日（金）まで。
「受験の手引き」は無償ダウンロードで配付。http://www.ecosys.or.jp/

問い合わせは、主催の㈶日本生態系協会ビオトープ管理士担当（TEL 03-5954-7106）へ。

▶「建築仕上診断技術者」資格取得講習会

㈳建築・設備維持保全推進協会（BELCA）の資格「建築仕上診断技術者」取得のための講習会。大阪での開催は以下の通り。

開催日　2007年９月19日(水)～９月21日(金)
１日目　9:50～17:40
２日目　9:00～17:00
３日目　9:00～16:45
（計19時間のカリキュラム）

会　場　大阪府私学教育文化会館・講堂
大阪市都島区網島町6-20

受講料　50,400円（消費税、テキスト含む）

申込み　2007年８月20日(月)まで。
所定の受講申込書のほかに住民票など必要書類を添えて、配達記録または簡易書留にて郵送する。

受講資格、受講申込書類の内容については、BELCA（電話 03-5252-3873、http://www.belca.or.jp）へ確認されたい。

▶「安全開口部生産評議会」結成

2007年6月、ガラス入り特定防火設備の認定取得企業5社が、ドア・窓・ガラス壁などの開口部の安全を考える任意団体「安全開口部生産評議会」を結成した。安全への自主表明を行い、自らの行動指針を対外的に宣言しているのが特徴で、ユーザーとともに安全な環境づくりを目指している。テーマは障害安全性、防災安全性、セキュリティ、環境安全性。参加企業は鐵矢工業、日章工業、紅雲製作所、清水サッシ、東北鐵矢工業の5社。監修に、松山賢工学博士（東京理科大学）が参画し、当初はウェブサイト「O-safety」での活動が中心となる。http://www.O-safety.net

安全開口部生産評議会事務局　03-3567-8441

▶医療福祉建築フォーラム2007

㈳日本医療福祉建築協会（JIHA）のフォーラムは、今年は「7：1看護」と「都市の高齢者の住まい」を軸に企画した。

1日目は、話題の「榊原記念病院の計画」や「公立病院の再生と医療法人改革」「PFI後のSPCでの施設維持管理の実際」の話の後、シンポジウムで「7：1看護のその先～どうなる、看護の質と病棟計画～」を話し合う。

2日目は「介護保険にとらわれない特定施設の意味」「独特な地域展開を進める愛知たいようの杜での事業者と設計者の協動」の後、午後から「都市における高齢者の住まいのさまざまな可能性」を事例紹介とシンポジウムで考えてみる。

なお今回は、JIHAの会員外は1日のみの出席ができるようにしている。

会　期　2007年9月13日(木)・14日(金)
9:30～16:30
会　場　建築会館ホール
東京都港区芝5-26-20
定　員　120名（定員になり次第締め切り）
参加費　一般35,000円、JIHA会員20,000円
一般の1日だけの受講は20,000円
申込み　FAX(03-3453-7573)またはHPからも申し込み可。http://www.jiha.jp

▶DESIGNERS SHOWCASE 参加者募集

インテリアのプロと企業をつなぐ国際展示会とセミナー「IPEC-2007」（有限責任中間法人 日本インテリアプランナー協会主催）では、デザイナーが主役となるデザイン提案の場〈デザイナーズ・ショーケース〉への参加者を募集している。

会　期　2007年11月21日(水)～24日(土)
会　場　東京ビッグサイト　西展示棟
テーマ　「ひと　環境　デザイン」
内　容　デザイナーのデザイン提案やアイデアを、インテリア関連企業とのコラボレーションにより実体化し、IPECにおいて提案・発表・発信する。
応募者　デザイナーまたはデザイン事務所・建築設計事務所と、インテリア関連企業とがチームを組み応募。
出展料　•ラージユニット（3×3mのスペース）1ユニット32万円（税抜き）
•スモールユニット（1.5×1.5m）1ユニット10万円（税抜き）
※占有面積内での展示は基本的に自由
応募先　2007年9月28日締切。応募はIPEC事務局（デルファイ研究所内、東京都文京区関口1-24-8、TEL 03-5261-5021）

詳細はhttp://www.ipec21.jp/2007/ds.htmlへ。

▶国立西洋美術館と企業のコラボレーション

国立西洋美術館（青柳正規館長、東京都台東区上野公園）は、独立行政法人の特色を活用して「OPEN Museum」の試みを今夏より展開していくことを予定している。

「Opportunities for People's Enjoyment and Networking（OPEN Museum）」とは、開かれた美術館を目指す意思を表している。より多くの、幅広い年齢層に美術を理解し楽しんでもらうよう、国立西洋美術館はセイコーエプソン㈱、エプソン販売㈱とコラボレーションし、今後3年間、企業とのパートナーシップで美術館普及活動を展開することとした。

たとえば、外光が注ぐ環境下では原画は展示できないが、デジタルプリントされたものは明るい場所で顔を近づけて見ることができる。エプソンのマイクロピエゾテクノロジーを駆使すれば、筆のタッチや色の重なりなど原画の微妙なニュアンスを感じることも可能だ。

国立西洋美術館では、「OPEN Museum」を展開する上で、インクジェットやスキャナ、プロジェクターなど画像映像機器で優れた技術を持つエプソンとのパートナーシップは、大きなポテンシャルを持つものと考えている。

国立西洋美術館
open museum
OFFICIAL PARTNER EPSON

▶卒業設計日本一展2007

建築界の甲子園と呼ぶにふさわしい、熱気あふれる卒業設計展がギャラリー・間で開催される。

展覧会は、「仙台建築都市学生会議」（東北大学、東北芸術工科大学、東北工業大学、宮城大学の建築関連学科の学生有志で構成）と、「せんだいメディアテーク」が共催する「せんだいデザインリーグ卒業設計日本一決定戦」の上位入賞者の作品展示を中心に、参加作品のポートフォリオアーカイヴの閲覧、審査過程のビデオの紹介などで構成される。

会　期　2007年8月22日(水)～8月31日(金)
11:00～18:00、日曜・月曜休館
会　場　ギャラリー・間　TEL 03-3402-1010
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3階
入　場　無料

▶竹中大工道具館企画展ふたつ

■「アジアの墨壺」展

日本・中国・朝鮮・東南アジアで用いられた墨壺を収集し、あわせて使用法や製作法を解説したパネルや映像を展示する。

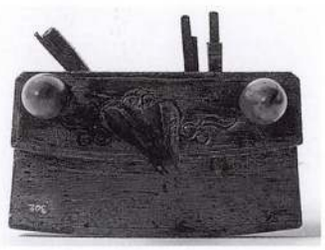


朝鮮の墨壺

会　期　2007年7月3日(火)～9月30日(日)
9:30～16:30（入館は16:00）
月曜休館（祝日の時は翌火曜休館）
場　所　竹中大工道具館　TEL 078-242-0216
神戸市中央区中山手通4-18-25
入館料　一般300円、大高生200円、中小生100円

■「削る―鉋の世界―」展

「大工道具の王様」とも呼ばれる鉋。大切に使い込まれた数々の鉋を通して、その歴史や機能・製作技術・使用方法、そして海外の様々な鉋について紹介する。約170点を展示。



ヨーロッパの溝切鉋（オーストリア、19世紀）

会　期　2007年8月6日(月)～9月21日(金)
10:00～18:00（最終日は17:00まで）
日曜・祝日・8/15～8/19休館
会　場　GALLERY A⁴(ギャラリーエークワッド)
東京都江東区新砂1-1-1
竹中工務店東京本店1階
入場料　無料

▶上村三代　受け継がれる想い

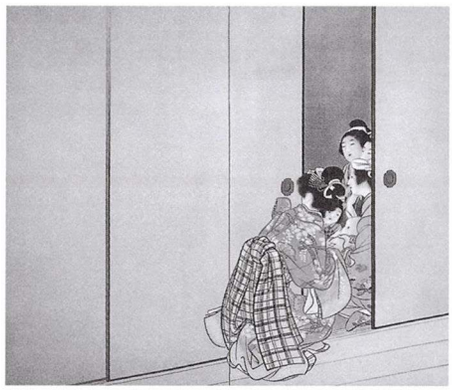
装飾の美と簡潔の美という上村松園・松篁・淳之が共に大切にしてきた作画への想いに焦点を当て、彼らが目指した日本画美の世界を、本画約20点と下絵・素描約10点で紹介する松伯美術館の常設展。

会　期　2007年7月26日(木)～9月9日(日)
10:00～17:00　月曜日休館

会　場　松伯美術館　TEL 0742-41-6666
奈良市登美ヶ丘2-1-4
近鉄奈良線〈学園前〉よりバス5分

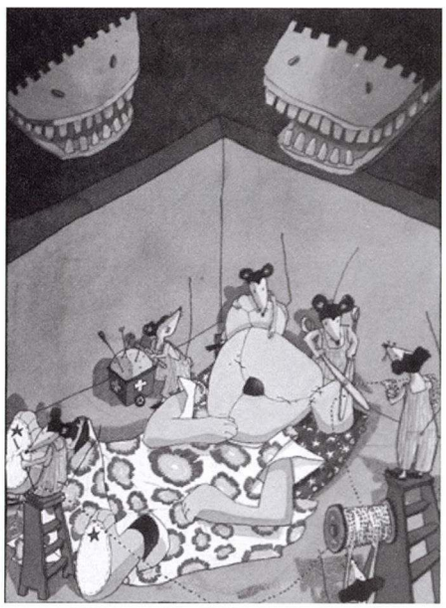
入館料　高大生を含む大人800円、小中生400円

展　示　• 装飾の美―松園「花見」「楊貴妃」、松篁「万葉の春」「白木蓮」、淳之「月汀」「水辺の四季」など
• 簡潔の美―松園「人形つかい」「雪」、松篁「真鶴」「雁金」、淳之「山湖」「月明に舞う」など。



上村松園「人形つかい」1910年

▶2007イタリア・ボローニャ国際絵本原画展



イザベル・シャテラール（フランス）
「クリスマスのテディベア」

毎年春にイタリアのボローニャで開催される児童図書見本市「ボローニャ児童図書展」に併設されて、「イラストレーションコンクール」が実施されている。このコンクールは、プロ・アマにかかわらず審査を受けられる公募展で、今年は58カ国2,653組のイラストレーターから応募があり、日本人17名を含む23カ国85組のイラストレーターが入選している。西宮市大谷記念美術館は、入選作品の原画と、2006年に「国際アンデルセン賞」を受賞したドイツ人イラストレーターのヴォルフ・エァルブルッフの作品を展示する。

会　期　2007年8月25日(土)～9月30日(日)
10:00～17:00　水曜日休館

会　場　西宮市大谷記念美術館
西宮市中浜町4-38
阪神電車「香櫨園」駅から徒歩6分

入館料　一般800円、高大生600円、小中生400円

※招待券は日本建築協会(TEL 06-6946-6981)へ。

▶川村記念美術館所蔵「巨匠と出会う名画展」

1990年5月に千葉県佐倉市に開館した川村記念美術館は、大日本インキ化学工業㈱が運営する私立美術館で、そのコレクションは質の高さにおいて高い評価を得ている。



パブロ・ピカソ《シルヴェット》1954年
©2007-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

川村記念美術館の大規模改築による休館に合わせて、兵庫県立美術館で川村コレクションを展示することが計画され、7月末から63日間、約65点が展示される。

会　期　2007年7月28日(土)～10月8日(月・祝)
10:00～18:00(金・土は20時まで)
月曜休館(祝日は開館、翌火曜休館)

会　場　兵庫県立美術館・企画展示室
神戸市中央区海岸通1-1-1
阪神電車「岩屋駅」から徒歩約8分

観覧料　一般1,200円、大高生900円、中小生500円

展　示　①レンブラントの部屋―レンブラント・ファン・レイン《広つば帽を被った男》…
②モダン・アートの幕開け―クロード・モネ《睡蓮》、ルノワール…
③前衛の時代―ルネ・マグリット《冒険の衣服》、エルンスト…
④抽象美術の黄金期―アレクサンダー・カルダー《四つの白い点》、ジャクソン・ポロック《緑、黒、黄褐色のコンポジション》、ウォーホル…
⑤ポップ・アートとフランク・ステラ―フランク・ステラ《トムリンソン・コート・パーク》ほか
⑥日本絵画の流れ―長谷川等伯《烏鷺図》、横山大観《輝く日本》、尾形光琳《柳に水鳥》、橋本関雪《木蘭》

※招待券は日本建築協会(TEL 06-6946-6981)へ。

▶ル・コルビュジエ：アンビルト―未完の建築―

生誕120年の今年、ル・コルビュジエの実現できなかったプロジェクトを通して、ル・コルビュジエの新たな一面を発見できれば…と、ギャルリー・タイセイでは、ル・コルビュジエ自選「作品集」の中で大切に扱っている未完のプロジェクトを、図面、スケッチ、映像などによって展観する。入場無料。

会期　2007年7月30日(月)～10月12日(金)
10:00～17:00　土日・祝日と8/13～17休み

会場　ギャルリー・タイセイ
東京都新宿区西新宿1-25-1
新宿センタービル17階

展示　• 1920年代―ヴォアザン計画(300万人のための都市計画)／ムンダネウム(美術館など) • 1930年代―ソビエトパレス(大規模ホール建築)／10万人収容の国立スタジアム • 1940年代―サント・ボーム(洞窟の礼拝堂など)／ロク・ロブ計画(リゾートホテル) • 1950年代―チャンディガールの総督公邸 • 1960年代―ストラスブールの会議場／ブラジルのフランス大使館／オリベッティセンター(研究所)／ヴェネツィアの病院

▶メルティング・ポイント展

「Melting Point」とは〈融点〉。固体が融解し液体化する温度であり、固体と液体が共存する瞬間である。この展覧会では、異なる二つのものが同時に存在する時、“場”を象徴的に表すものとして用いられている。
http://www.operacity.jp/参照。

ジム・ランビー、渋谷清道、エルネスト・ネトにより展示空間に合わせて制作されるインスタレーションが、東京オペラシティアートギャラリーの空間を作品へと変容させる。

会　期　2007年7月21日(土)～10月14日(日)
11:00～19:00（金・土は20:00まで）
月曜日休館（祝日のとき翌火曜日）

会　場　東京オペラシティアートギャラリー
東京都新宿区西新宿3-20-2

入場料　900円、大高生700円、中小生500円

理事会

第1回通常理事会
6月6日（水）15：00～15：35
出席者　佐野会長ほか44名（委任状含む）
場　所　OMMビル2階1号会議室
議　事（1）平成18年度事業報告（案）の件
（2）平成18年度収支決算報告（案）の件

第1回臨時理事会
6月22日（金）16：35～16：50
場　所　OMMビル地下1階ギャラリー
出席者　佐野会長ほか46名（委任状含む）
議　事（1）役付役員選任の件
（2）常設委員長並びに常任理事委嘱の件
（3）理事の会務分掌の件

総　会

第1回通常総会
6月14日（木）16：05～16：33
出席者　佐野会長ほか888名
（1,805口　委任状含む）
場　所　OMMビル地下1階ギャラリー
議　案（1）平成18年度事業報告（案）の件
（2）平成18年度収支決算報告（案）の件
（3）役員選任の件

評議員会

第1回定時評議員会
6月6日（水）14：05～14：40
出席者　佐野会長ほか39名（委任状含む）
議　案（1）役員候補者選任の件
報　告（1）平成18年度事業報告（案）の件
（2）平成18年度収支決算報告（案）の件

編集委員会

第3回編集委員会
6月13日（水）18：00～21：00
出席者　設楽委員長ほか6名
議　事（1）7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集経過報告
（2）8月号「建築系雑誌が伝えるもの」特集経過報告
（3）9月号法令特集の企画
（4）10月号「第54回青年技術者」特集報告
（5）11月号施工材料特集の企画
（6）12月号構造特集の企画
（7）作品作風、広告企画、10年委員会からの報告
（8）読者アンケートの実施に向けて
（9）収支状況報告

第3回構造分科会
6月8日（金）18：20～20：20
出席者　房安幹事ほか5名
議　事（1）19年度構造分科会体制
（2）「構造の頁」の企画
（3）12月号構造特集の企画
（4）情報交換

第3回設備分科会
6月6日（水）18：00～20：30
出席者　赤澤幹事ほか6名
議　事（1）7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集報告
（2）「設備の頁」の企画
（3）“測定機器シリーズ”頁の企画

第3回施工材料分科会
6月5日（火）17：00～18：00
出席者　藤丸幹事ほか5名
議　事　11月号特集テーマについて

第3回法令分科会
6月6日（水）15：00～16：30
出席者　片岡幹事ほか2名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）9月号法令特集の企画
（3）情報交換

第3回作品作風小委員会
6月28日（木）19：00～20：00
出席者　井上副委員長ほか8名
議　事（1）作品の選定5作品
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）前回の編集委員会の報告
（5）その他

第3回広告企画小委員会
6月13日（水）17：00～18：00
出席者　前田副委員長ほか2名
議　事（1）2月号特集の企画
（2）7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集経過報告
（3）8月号「建築系雑誌が伝えるもの」特集の企画
（4）9月号法令特集の企画
（5）10月号「第54回青年技術者」特集の報告
（6）11月号施工材料特集の企画
（7）新しい広告頁の企画
（8）広告掲載状況

第2回10年委員会
6月15日（金）19：30～20：00
出席者　前川副委員長ほか3名
議　事　活動の方向性について

出版委員会

第3回出版委員会
6月21日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか9名
場　所　住まいの研究室
議　事（1）〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
（2）進行中のテーマについて
（3）出版記念講演会について
（4）その他

教育委員会

第1回講習会小委員会　講師打合せ
6月18日（月）18：00～19：00
出席者　河野講師ほか2名
議　事（1）パンフレット内容の改訂について
（2）本年度の開催内容について

入会者（敬称略）

〔個人正会員〕
亀井　　清／㈱亀鉄組
塚口眞佐子／大阪樟蔭女子大学
中川　　守／中川一級建築設計事務所
西原　泰宏／㈲西原塗装工業
藤崎　匡昭／阿部電気工事
森本　博久／㈲森本ガス住設
矢野　佳英／㈲矢野商会
渡辺　俊之／海 設計工房

●訃報
〔名誉正会員〕
馬田 廣行 氏　㈱馬田工務店

第6回 読者と選ぶ「建築と社会」賞入賞発表

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■第6回選考委員(50音順)
井上　豊(財団法人日本建築総合試験所試験研究センター長・日本建築協会副会長)
柏木浩一(兵庫県立大学大学院教授)
鈴木克彦(京都工芸繊維大学大学院准教授・「建築と社会」編集委員)
徳矢典子(弁護士・徳矢法律事務所)

第6回読者と選ぶ「建築と社会」賞

総評

選考委員長　井上　豊

本年度で第6回を迎える読者と選ぶ「建築と社会」賞については、本誌2006年1月号から12月号までの12冊に掲載された記事および建築作品を対象として、読者からの投票を基に、編集委員会からの推薦を中心に選考が行われた。論考部門、建築作品部門ともに、それぞれ10を超える記事および作品が推薦され、2007年4月13日に開催された選考委員会おいて、本誌「建築と社会」の目指す理念・使命に相応しい内容を念頭に置きながら、慎重な審議を経て、別掲のように入賞とする記事及び建築作品を選出した。

まず、論考部門の3点について述べる。1月号の**「なぜ六甲道駅南地区再開発事業は10年間で完成したか―住民の合意形成過程の検証―」(有光友興氏)**は、地域再開発プロジェクト実施への住民の真摯な取り組みの検証が評価された。3月号の**「地方文化の源流を訪ねて―東海道47番目の宿・関宿―」(嶋村明彦氏)**は、歴史の中での「宿」の位置づけが評価された。4月号の**「終末医療施設(家)としての京町家復活」(泉 紀世史・大坪欽彌・堀口利夫氏)**は、再生京町家を用いた地域医療の地道な活動が評価された。

一方、建築作品部門の4点については、以下のとおりである。3月号の**「産業技術記念館10周年記念事業」**は、建物保存の中に産業の流れ展示と体験学習を盛り込んだことが評価された。5月号の**「西谷ふれあい夢プラザ」**は、施設再生における巧みな新旧組み合わせが評価された。8月号の**「関西大学総合学生会館メディアパーク凛風館」**は、若者を対象とした建築形成の斬新さが評価された。9月号の**「県立西播磨総合リハビリテーションセンター　リハビリ中央病院」**は、“いやし”の建築空間構成が評価された。

以上の記事、建築作品のほかに、両部門とも多くの優れたものがあったが、選出点数の関係から、残念ながら入賞に含めることができなかった。さらに次の機会に期待したい。

最後に、入賞の皆様にお祝い申し上げるとともに、この企画にいろいろとご尽力、ご協力下さった読者、編集委員会はじめ関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

論考部門入賞

なぜ六甲道駅南地区再開発事業は10年間で完成したか―住民の合意形成過程の検証―

有光友興

2006年1月号掲載



有光友興

大阪市立大学大学院修了
昭和43(1968)年9月　竹中工務店入社
平成5(1993)年　環境開発研究所大阪事務所長
平成12(2000)年4月　定年退職
平成18(2006)年7月　病没

- 平成7年　再開発コーディネーター協会「高山賞」受賞
- 「生涯再開発」を掲げ、門真プラザ、川西駅、池田駅、六甲道駅等における再開発に心血を注ぐ
- 授賞論文が、最後の論文となった

間もなく有光さんの一周忌になります。「生涯再開発」を志して生きた有光さんの、最後に残した論考が今回受賞になりました。

再開発事業は、関係者のエゴが生々しくぶつかり合う修羅場を何度も乗り越えることになります。そのような場で有光さんは、時に、敢えて歯に衣着せぬ正論を口調激しく語りました。関係者にはしばしば煙たがられる存在にもなりました。そうやって出来ていく都市の再開発に、有光さんは深い諦観をもって取り組んでいたように私は思います。

生前の数年、有光さんは死を覚悟していました。今回受賞した論考は、有光さん40年の再開発人生を振り返る遺稿となりました。会員・読者の皆様に、行間にこめられたそのような有光さんの様々な思いを読み取って頂いたのではないかと思います。

受賞は、単に論考の受賞であるだけでなく、再開発に生きた有光さんへの皆様の最後の拍手であるように私には思われます。傍らで生きた私からも、心からお礼申し上げます。(6月記)

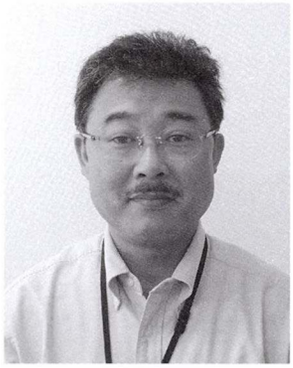
(京都造形芸術大学／井口勝文)

論考部門入賞

地方文化の源流を訪ねて―東海道47番目の宿・関宿―

嶋村明彦

2006年３月号掲載



嶋村明彦

1989年　千葉大学大学院（建築学）修了
1992年　長野県木曾郡楢川村（現塩尻市）教育委員会で奈良井宿の町並み保存担当
1995年　三重県鈴鹿郡関町（現亀山市）教育委員会で関宿の町並み保存担当
2006年～亀山市教育委員会まちなみ・文化財室室長

本論考については、日本建築協会東海支部の特別編集委員会の皆さまが、貴重な機会を与えてくださいました。感謝を申し上げます。

私は大学在学中より歴史的な町並みの保存に興味を持ち、行政においてこれを担当する部局に長年勤めております。私の願いは、古い町並みにある伝統的な建造物が、文化財的な価値を有しながら、そこにお住まいの方々の手によって大切に守られていくことです。

伝統的な建造物の活用が関心を集める昨今ではありますが、その実例の多くは行政による公開施設等の整備であったり、個人や企業等の経営的な活動であることが多いように思われます。しかし、「生活の場」としての町並み保存を進めている関宿では、ごくあたりまえに人々が生活を営んでいる「住まい」を保存の対象としています。町並みの保存が地域に生活する人々の生活環境の充実と密接に結びついているのです。

伝統的な建造物で生活を続けていくためには、伝統的建造物の文化財的価値をしっかりと把握した上で、生活者の住まいへの要望を的確に把握し、課題を解決していくことが必要です。そうした意味で、建築家の参加が不可欠です。2007年１月、亀山市内で活動する建築家を中心として、地域の歴史的資産である建造物の保存・活用に取り組む団体が発足しました。関宿では住民の保存活動は盛んでしたが、保存を支える技術者が組織化されたのは初めてのことです。

本年４月15日には、本市を震源とし震度５強を記録した地震が発生しました。幸い町並み保存地区では大きな被害は発生しませんでしたが、改めて伝統的建造物の耐震補強や、木造建造物が密集する保存地区の防災について市民の関心が高まっています。

論考部門入賞

終末医療施設（家）としての京町家復活

泉 紀世史・大坪欽彌・堀口利夫

2006年４月号掲載



泉　紀世史

防衛大学校中退。近畿大学理工学部建築学科卒業。近畿建築構造研究所、建設専門学校講師を経て㈱ピュア・ナツメ設計代表取締役



大坪欽彌

昭和43年京都大学医学部卒業。以後付属病院、官公立病院、私立病院に勤務の傍ら、昭和60年頃、診療所開設



堀口利夫

昭和44年桃山学院大学卒業。左官業堀口工業所に入り飯場生活を経験
昭和54年㈱堀口建設工業設立

2005年４月より、この施設についての計画が始まりました。2005年11月に完成し、現在１階には77歳の女性が、２階には寝たきりの85歳の女性が入居しています。

2007年５月に、この町家を訪問しました。１階の女性は「ここに居ると、とにかく気分が良い。近くに先生がおられ、全く安心です。病院の構えと違い、家の構えだから嬉しい。デイサービスの職員さんも『けなりいな～』（京都弁で羨ましいの意）と言われます」。２階の女性は「寝たきりですが、いい気分です。このような家で過ごせて幸せです」と話されています。

そう遠くない昔、人は家で生まれて家で死んでいきました。実際、この入居されている女性を見ていますと、現代の病院とは一味違うことを実感します。対話も大きな声で、しかも言いたいことも言われています。このような施設が増えることは、人生の終末に夢があるように思います。　（泉　紀世史）

●

病気で次第に体が衰え死期を迎える高齢者は、自宅で家族にみとられて静かに、“いわゆる自然死または尊厳死”をとの希望が強いようです。一方、その方の希望を支える息子、息子の嫁や娘は、死に対する不安、必要な時に直ぐに治療を受けられるかとの不安と、介護看護の手間、自分の仕事などの間でしり込みすることが多いようです。

築80年の家屋を、寝たきりや虚弱な老齢の方に普通の家に住みながら医療看護介護を受け、ここで死を迎えるまで部屋を借りていただけるようにしました。私どもが医療を、病院での検査治療が必要な時には相談にのり、ヘルパーには生活全般の介護をお願いしました。家族は手を掛けなくてよく、ご本人とご家族に予想以上に喜んでもらえました。

そこで私どもの診療所の半径約500ｍ以内にある持ち家を直して入居、近隣のアパートにも入居していただき、高齢者の方が自宅または自宅と似た環境で最期を迎えられる手伝いを、と思っています。　（大坪欽彌）

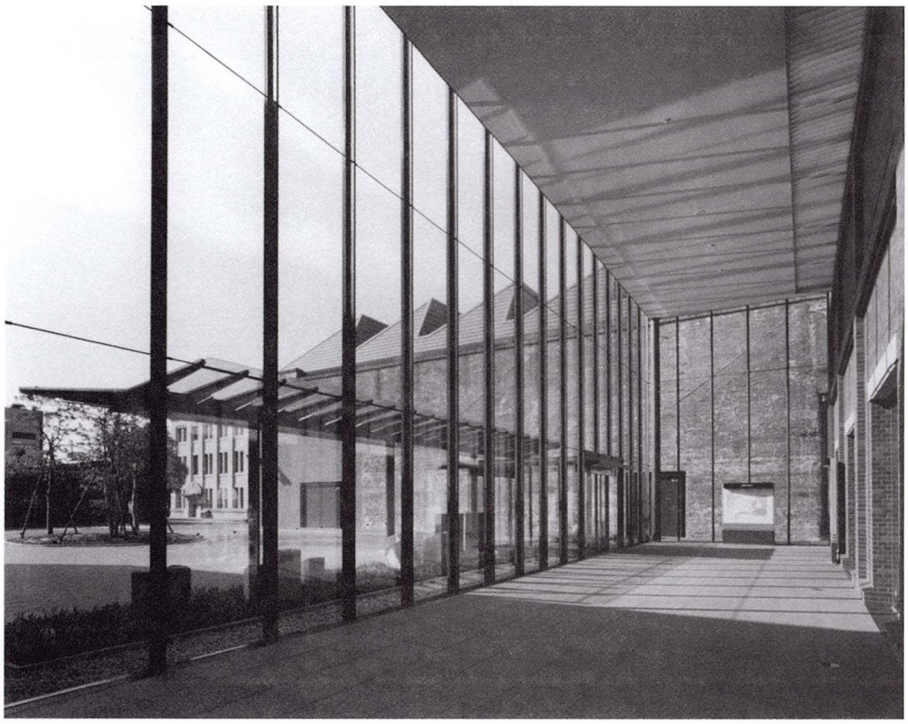
●

私だけの建物総論では、鉄骨、RC、SRC等のビルで大事なのは耐震や構造力学であるのに対して、木造町家建物、特に京町家にあって重要視されるのは、やさしさと美である。木造の内外、どの角度から眺めても、そこには人が生きていく上に必要なやすらぎが「美」として息づいている。しかも住む人の心を癒す顔をして。

この美を醸し出すのは、見た目・色彩はもとより、ほぞ・込みせん等仕口からムクリ・破風・床脇（とこわき）・月見障子と情緒ある仕舞である。力学は天秤・やじろ兵衛・合掌・火打と野暮な仕上げは一つもない。熟練の職人技が織りなす美術品が組み合わされた集合構造物なのだ。どこの何を見ても、美が潜み佇んでいる。これはまさに、人をやすらぎの世界へ誘う美術造営物である。技術と熟練と計算が交じり合わなければ出来ない世界―難しい、世界中どこにもない美の極地の住処（すみか）である。　（堀口利夫）

作品部門入賞

産業技術記念館10周年記念事業



繊維と自動車の二大産業の歴史を通じて、産業と技術の変遷を見通す博物館の増築である。
この施設は1911年設立の近代工場のコンバージョンにより1994年に開館しているが、今回、建屋の増築を主に、展示内容の拡充を図った。敷地内に保存されていた大正期のレンガ壁を外壁として活用し、ノコギリ状の屋根を継ぎ目なく連続させることにより、大正期以来のこの地域の「場」の印象をより強く継承させた増築計画とした。
木造柱の林立する近代工場を再生した「繊維機械館」と大空間の「自動車館」は、圧倒的な迫力のある「原寸大」の展示物を体験しながら、広大なモノづくりの世界に触れることができる濃密な空間である。
なお、2007年には19世紀末に製造された蒸気機関をドイツより移設し、模擬運転による動態展示を開始している。産業革命の原動力となった世界的にも貴重な産業遺産を新たなシンボルとすることで、産業技術史博物館としての深度をより高めている。

2006年３月号掲載

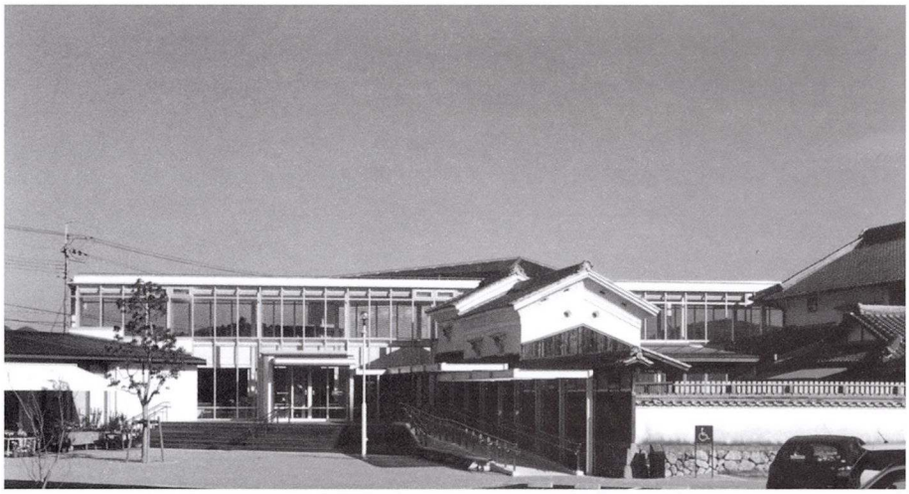
■産業技術記念館10周年記念事業
所在地－名古屋市西区則武新町4-1-35
建築主－トヨタテクノミュージアム
　　産業技術記念館
設計者－株式会社竹中工務店
施工者－株式会社竹中工務店



因　純一
1993年入社
名古屋支店設計部
• 代表作品―D-Square、ホテル九重増築、静岡サレジオ幼稚園

作品部門入賞

西谷ふれあい夢プラザ



本施設は、地域住民から寄贈された江戸時代から続く古い木造民家（母屋・蔵・診療所）を利用・再生し、かつ新しい建物を増築した、住民センターと農業振興施設からなる複合施設である。この地域は、住民たちにより収穫祭などの自主的活動が盛んであり、本施設は、その活動の中心の場として利用されている。
この新旧施設の中心に、「タイムギャラリー」と呼ぶ２層吹抜けのガラス張りの空間をつくり、施設のシンボルとするとともに、新旧施設が有機的に融合することを目指した。また、この空間は新旧施設に対し光が入り、風が通り抜ける役割を担っている。
長い歴史の中で増築を繰り返してきた木造民家の考えや表情を受け継ぎつつ今回の増築を行い、新しくも懐かしさを感じる施設づくりを行った。

2006年５月号掲載



畑　正俊
1958　大阪府生まれ
1982　大阪工業大学建築科卒業
1982　安井建築設計事務所入社
作品　大阪市　花と緑と自然の情報センター
　　六甲道駅南地区再開発事業１番街
　　岡山県立図書館
　　長崎市立図書館（建設中）



戸川勝之
1970　兵庫県生まれ
1994　大阪大学環境工学科卒業
1994　安井建築設計事務所入社
作品　大阪市　花と緑と自然の情報センター
　　六甲道駅南地区再開発事業１番街
　　岡山県立図書館
　　長崎市立図書館（建設中）

■西谷ふれあい夢プラザ
所在地－兵庫県宝塚市大原野字炭屋１番の１外
建築主－宝塚市
設計者－安井建築設計事務所
監理者－宝塚市建設部建築営繕課
施工者－中武建設工業

作品部門入賞

関西大学総合学生会館 メディアパーク凜風館

小高い緑地であった「自然の丘」を「建築の丘」へと変換し、全体がコミュニケーションの場となるような厚生施設を目指しました。120本のソメイヨシノをはじめとする、さまざまな樹木を有する屋上緑地は、学生だけでなく、多くの一般市民にも利用されています。

太陽光発電、風力発電、コジェネレーションシステム、雨水利用、生ゴミ処理機など、環境配慮の技術を導入するサステナブルな思想は、この建物にとどまらず、その後の施設計画にも展開されています。

緑豊かなキャンパスに数多く残る村野藤吾作品の素材感と均質ではないデザインを継承することで、新旧の建物が呼応し、自然と建築が融合する重層的な環境を創出しました。





大平滋彦　1988年入社
大阪本店設計部第４部門
• 代表作品－新日本海フェリー敦賀ターミナル、関西大学秀麗館、聖ヨゼフ学園京都暁星高校

浜谷朋之　1993年入社
大阪本店設計部第４部門
• 代表作品－ホテル近鉄ユニバーサル・シティ、関西大学第３学舎



■関西大学総合学生会館メディアパーク凜風館
所在地－大阪府吹田市千里山東３丁目10番１号
建築主－学校法人 関西大学
設計・監理－株式会社 竹中工務店
施工者－株式会社 竹中工務店

2006年８月号掲載

作品部門入賞

県立西播磨総合リハビリテーションセンター リハビリ中央病院

テクノポリスの幹線沿いは、「産業ゾーン」としてのハイテクモダンデザインでほぼ統一されているが、ここは、「医療健康福祉ゾーン」＝「生活の場」として土地利用計画を転換し、「温かくて明るく元気の出る空間づくり」「病院らしくない病院」として、「リゾート的な癒しの空間」を目指した。

また、「100年の風格」と「エコホスピタル」をコンセプトに、ケミカル製品や病院特有の工業化製品を極力排除して、時間とともに風格を増すエコマテリアルの多用で、素朴な手づくり感覚を求め、かつ徹底した木質化（740㎡、うち県内産580㎥）、屋上緑化、全面外断熱（中空煉瓦積）、雨水利用、コ・ジェネ、複層ガラス、省エネ型照明、太陽光発電等でCO_2削減を図った。



2006年９月号掲載



黒田達雄
• 昭和47年兵庫県営繕課採用（営繕通算28年目）
• 主作品：「県立総合リハビリ中央病院」「姫工大附属高校」「但馬長寿の郷」「三田祥雲館高校」ほか
• 受賞歴：病院建築賞、公共建築賞、建設大臣賞、全建賞、新建正賞、近畿建築士会ひろば賞ほか

■県立西播磨総合リハビリテーションセンター リハビリ中央病院
所在地－兵庫県たつの市新宮町光都1-490-22
建築主－兵庫県
設計・監理－兵庫県住宅建築局営繕課
施工者－病院棟/大林・大豊・上林・成影特別JV
研修交流棟/美樹・石川島播磨特別JV

選考委員講評

弁護士

徳矢典子

【論考部門】

なぜ六甲道駅南地区再開発事業は10年間で完成したか―住民の合意形成過程の検証―

阪神大震災ならずとも、6ha、700所帯を擁した地区の再開発事業と聞いただけでも、その困難さが思いやられる。それを10年で成し遂げた上、その要因を分析、検証された本論考は、貴重かつ示唆に富むもので、あらためて、関係者の方々の叡智とご努力に敬意を表したい。今後の都市づくりへの示唆に富む公共性、社会性の高い論考として評価された。

地方文化の源流を訪ねて―東海道47番目の宿・関宿―

関宿は、伝統的建造物を次世代に引き継ぐことを重視して修理事業を行い、また、周辺との調和を重視した修景事業を行うと同時に、街並み景観の整備にも力を入れている。これにより、本物の日本の伝統的な生活文化が体感できる貴重な町づくりの実現が期待でき、環境への配慮、社会性、公共性の点に鑑みて高く評価したい。

終末医療施設（家）としての京町家復活

お医者さんの自宅兼診療所に近い京町家が医療施設に変身した事例であるが、そこには人間の尊厳を大切に思う町のお医者さんと、その思いを理解して協力された設計者と施工者のご努力と美意識が感じられる。町家保存とともに環境に配慮した町家の新しい活用方法として意義のある作品である。

【作品部門】

産業技術記念館10周年記念事業

1911年設立のレンガ造工場を増築・改修して博物館とした建物。100年の歴史が伝わる雰囲気と素材、技、企業理念が体感できる空間として、社会性に優れている点を評価した。

西谷ふれあい夢プラザ

地域住民から寄贈された江戸時代の民家を、環境を重視しながら活用しており、「タイムギャラリー」と名付けた空間を設けて新施設との融合を工夫した点を高く評価した。

関西大学総合学生会館メディアパーク凜風館

巨大に横たわる個性的な外観。屋上の植栽も含め緑化を重視した環境への配慮が評価された。

県立西播磨総合リハビリテーションセンター リハビリ中央病院

木の優しさ、温かさに包まれた建物であり、そこにいるだけで、生きる意欲が湧いてくるような思いがする。それが人間の自然治癒力を高めるとすれば、リハビリ施設としての目的にもかない、環境への配慮、公共性、社会性を満たす優れた作品といえる。

選考委員講評

兵庫県立大学大学院教授

柏木浩一

本賞の名前につく2つのキーワード、社会、建築を、時間という観点で眺めてみると気になることがある。社会の速い動き（正確には「社会の、情報伝達スピードの速い動き」なのだが）を建築が追っかけ過ぎ、目新しい「新製品」を多産し過ぎることである。言うまでもなく、建築は一度つくると息の長いもの。ドンと構えて、息長く継続しながら、地道に人の幸せに貢献するのが本務だと思う。この観点から評価する。

「**なぜ六甲道駅南地区再開発事業は10年間で完成したか**」は、阪神・淡路大震災で木造家屋70%が倒壊した地区を市街地再開発事業するという、権利調整、事業採算にかかわる作業の報告で、10年もの長きにわたり地道で膨大なエネルギーを費やし、住民の幸せに立ち向かっていった点である。「**地方文化の源流を訪ねて―東海道47番目の宿・関宿―**」は、20年以上にわたる町並み保存事業の報告で、各地で同様の試みがなされていることでメディアに取り上げられることも少ないが、それにもかかわらず地道な作業を継続した点である。「**終末医療施設（家）としての京町家復活**」は、築70年の京町家に新たな息吹を吹き込んで、終末医療施設に改修するという報告で、この新しい試みは、各所に同様の試みがなされたときに周辺住民との関係がうまくいくのかとの懸念もないわけではないが、人生最期のときを、病院（医療上は合理的、大半はここ）、自宅（医療困難、「情」があって本当は誰もがここで死にたい）の両利点を兼ね備えた場所で、という新たなプログラムを現実のものにした点である。

「**産業技術記念館10周年記念事業**」は、10年前に話題となった作品（1911年設立レンガ造工場の再生活用博物館）の増築・改修で、それゆえ宿命的に話題性に欠けるが、それにもめげず当初の建築イメージを執拗に継続しようとした点である。「**西谷ふれあい夢プラザ**」は、現代建築と江戸時代木造民家群のコンプレックスで、新旧対比を際立たせたデザイン（陸屋根ガラス張りと屋根瓦和風）で、文化遺産の基本理念「オーセンティシティー（本物であること。新旧を明確にする）」を貫徹した点である。「**関西大学総合学生会館メディアパーク凜風館**」は、学校建築として初のCASBEE「Sランク」を達成した作品で、環境に対する地道な設計努力と、個性的なデザインを巧みに処理した点である。「**県立西播磨総合リハビリテーションセンター リハビリ中央病院**」は、「病院らしくない病院」を目指して時間とともに風格を増す煉瓦、木、石、瓦などの素材を多用した点である。

選考委員講評

京都工芸繊維大学大学院准教授

鈴木克彦

本年度は、本賞の趣旨である「社会性・環境などへの配慮」に優れた個性ある論考・作品が多く見られた。

論文・記事部門では、有光氏の遺作となった「**なぜ六甲道駅南地区再開発事業は10年間で完成したか**」が、迫力ある内容であった。地権者の合意形成が難しいと言われる市街地再開発事業だが、本論文は地元住民と専門家との協議の過程をわかりやすく詳細に明らかにしている。故人の業績を大いに賞賛したい。他の受賞論文では、「**地方文化の源流を訪ねて―東海道47番目の宿・関宿―**」が、生活の場としての街並み形成と保存・修景の変遷を緻密に紹介した力作であった。また、京町家ブームのさなか、昔の家族関係に近い形で人生の終末を迎えられる施設として京町家を再生したユニークな取り組みを紹介した「**終末医療施設（家）としての京町家復活**」も興味深い内容であった。賞の選考にあたっては、患者さんや近隣住民の評価が実際どうなのかという点が気がかりであったが、この医療施設に入居している77歳の女性と89歳の女性（寝たきり）の感想は、「先生が近くにいて安心で、病院の構えと違うのでとても喜んでいる」とのこと、また近隣住民もこのような施設がもっと増えていくことを望んでいるとのことである。

一方、作品の中で特に印象深かったものが、江戸時代から続く古い木造民家の敷地内に計画された「**西谷ふれあい夢プラザ**」である。本施設は市民の自主的活動の中心の場として活用が期待されているが、有機的に融合した新旧施設に触れることで市民意識が自然に育つような施設運営を願いたい。既存ストックを保存・活用したという点では、レンガ造の工場を再生活用した「**産業技術記念館10周年記念事業**」も、ものづくりの精神を駆り立てるような継続的な施設運営に感心した。

他の受賞作品では、環境負荷への配慮という点で評価できるものがあった。「**関西大学総合学生会館メディアパーク凜風館**」は、CASBEEの評価でSランクを達成しており、村野藤吾氏の手によって構築されたキャンパスに違和感なく溶け込んでいる。また、「**県立西播磨総合リハビリテーションセンター リハビリ中央病院**」では、エコマテリアルを多用した病院らしくない手づくり感覚のデザインが印象的であった。環境にやさしいことは人にもやさしいことを再認識させられる作品である。

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

OKUJU
Space Creator
クオリティ&コストパフォーマンス
ALTsシステム
スナップ工法
SP-600
メタルシステム天井
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社オクジュー
本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・南九州・名古屋・上海

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工
ダイダン株式会社
本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士
本　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

www.naniwa.com
We have hope
■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作
株式会社NPCコーポレーション
本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代)　fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代)　fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1 一光浜松町ビル7F
tel:(03)3433-5211(代)　fax:(03)5776-7733
(旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱)

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充塡モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL　大阪（06）6877－1581

TOSTEM

新時代のパイオニアはいつもトステム



スタンダードの、その先へ。

PRO-SE

次世代ビル用サッシ・プローゼ

5つのバリュー・アップコンセプト

Ecology / Design / Safety&Security / Amenity / Universal Design
エコロジー　デザイン　セーフティ・セキュリティ　アメニティ　ユニバーサルデザイン

トステムビル用商品インターネットホームページ　http://www.tostem.co.jp/bldg/

トステム株式会社

ビル建材事業本部 営業開発部 e-DESK
東京都台東区北上野1-8-1 住友不動産上野ビル3号館　TEL:03-3845-7344

TOSTEM SUZUKI

“安心·安全” お届けつづけて一世紀
～シャッターの歴史は、トステム鈴木シャッターから～

1903年創業以来、シャッター専業メーカーとして、明治時代の鉄板を組み合わせたシャッターから、現在のファッショナブルなものまで、時代の求める製品を開発し、多くの建築物にご採用いただいてまいりました。

防災の必要から生まれた防火・防煙シャッター、シートを使用した防火·防煙ガラスクロス製スクリーン、軽量シャッター、シースルー型シャッター、工場・倉庫の出入り口に高速シートシャッター、防煙たれ壁、豪雨・高潮から水の浸入を防ぐ防水板と、幅広い製品を取り揃えております。

また万一の故障・トラブルに対処するために24時間・365日フルタイムメンテナンスサービスを実施しております。

今日、シャッターは災害から私たちを守るものから、より快適な生活空間を実現するものに変化しつつあります。これからも、安心・安全をモットーとし、新しい技術で未来を開き、快適生活空間の創造に努めてまいります。



トステム鈴木シャッター株式会社

本　　社	東京都豊島区南大塚1-1-4	TEL03-3944-1111
大阪支店	大阪市旭区新森1-7-47	TEL06-6956-6221
京都営業所	京都市南区上鳥羽北塔ノ本町12-2	TEL075-672-8664
神戸営業所	神戸市兵庫区御崎本町4-2-37	TEL078-651-5520

トステム鈴木シャッター株式会社

建築と社会　2007.08　Vol.88 No.1025

社団法人 日本建築協会　〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 電話：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 http://www.aaj.or.jp
毎月1回1日発行 昭和24年3月19日第3種郵便物認可 ISSN 0912-8182

定価 1,200円（税込）
正会員の講読料は会費に含めて徴収

雑誌　03379-8